

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年十月廿日印刷納本 昭和十三年十一月一日發行
第四卷 第十一號

浄土

十一月號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

弱い兒も丈夫になる 紫外線ビタミン



發育が悪い。皮膚や粘膜の抵抗力が薄弱で、感冒をひき易い、濕疹が出来る、下痢をし勝ちだ、或はまた首にグリグリがある、胸廓が狭い、神経質で、癢が強い等々、斯うした虚弱兒の大半はビタミンAとD、(紫外線ビタミン)の不足に基づくと言はれます。

これらの虚弱兒には大に日光浴が必要であり、また人工太陽燈の照射なども體質強化に有効とされますが、近年ビタミン學の進歩によつて、單なる内服によつて充分効果あるビタミン劑が發明され、虚弱兒の強壯劑として盛んに利用されて居ります。

ビタミン劑として代表的な婦人子供用理研ビタミンはビタミンAと同時に紫外線ビタミンDをも豊富に含有して居りますので、日光紫外線に優る保健劑として一日二球宛お與へになれば抵抗力を強化し體質を改善し、發育を促し、ビタミン独自の強壯作用を申分なく發揮します。

婦人子供用理研ビタミンは服み易いグロビュール球入りで、どんな虚弱な兒も喜んで服みます。五拾球入壹圓卅錢、百球入貳圓五拾錢で各地藥店に販賣。總代理店は東京大阪株式會社玉置商店



◇ 浄 土 第四卷 第十一號 十一月號 目次 ◇

表紙……………鈴木金平
扉繪……………鷹山宇一

知る・悟る・信ずる 山口 察 常 (五)

佛像奉彫に就いて……………山本瑞雲 (八)

僧侶は社會の中へ……………本誌記者 (六)

大森飛行機墜落事件 遭難者の臨終……………勝野積惠 (五)

信 仰 實 話 迷信と正信……………綾部華子 (四)

法然上人をめぐる人々 甘粕太郎陣中記 (斎藤清畫)……………中村康隆 (二)

隨 上 越 雜 記……………村田嘉久子 (三)

筆 戰 地 の 秋……………一瀬秀雄 (三)

信 仰 相 談……………中村辨康 (四)



支那小説 廣東の商人たち (大羽比) 荒井新 (三)

物語 大食ひじり (服部) 佐賀一海 (四)

童話電報 (齊藤) 高橋良和 (四)

淨土の旅 和田正系 (六)

歌壇 與謝野晶子選 (三)

俳壇 太田耳動子選 (三)

支那巷談 双葉信 (六)

戰地の法要 山田昇禪 (六)

日常勤行式講讃 中村辨康 (六)

鑽仰運動ニュース (五)

誌友だより (五)

編輯部だより (五)

！峰高最の書用教布！刊新

我が信仰

— 内容 —

知恩院	本願	懺悔	念佛	信仰
岡本かの子	佐藤春夫	吉田絃二郎	武者小路實篤	郁芳隨圓

文壇の巨星が語る信仰の體驗！

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點ぜずにはおかない！
この内容、この定價！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

淨土

十一月號

池の水

おのが心こころに似たりけり

にとりすむこと

さだめなければ

法然上人諷歌





知る・悟る・信ずる

文學博士 山口 察 常

一

人は生れ落ちる時から、物を知らうとする欲求を有つて居る。やうく幾らか物を言ひ得るやうになると、見るもの聞くものに對して、疑問を起して來て、「あれは何」、「これは何」とうるさいまでに問ひ糺すものである。生長の程度によつて、多少の相異はあるとしても、一二歳から七八歳までに、問うては知り、聞いては知る所の智識は、實に夥しいものである。眼に見え耳に聞える總てのものを新しい興味を以て知り得たいと望むので、次から次と智識の量が増して來る。やがて學校生活に入ると規律的に日々新しい智識を取入れて、その欲求を満足して行くのである。斯くして學校の程度が進むにつれ、年と共に個性の趨く所に隨ひ、尙新しい智識を求めて已まない。斯様にして幼年少年は青年壯年となり、己が踏み行く日常生活

活の道を、それらの智識を資本として歩み出すこととなるのである。この智識を求めて已まないといふ人の本能が、積み積まれて今日の科學の發達となり、文化の向上となり、その初め處獸とも大差なき生活を暮らした者が、今や全く大きな距離を作つて、人間萬能の世界とはなつて來たのである。

しかし個人に就いて考へて見ると、この智識に對する欲求は何時まで行つても已まないが、それと共にその智識の對象も亦無限であつて、決して最終點には達し得ない。これが人の惱みとなつて來る。勿論今の人を古の人に比べて見れば、智識の程度は到底同日の論ではない。姉崎博士であつたかと言はれた通りあの「望月の缺けたることなしと思へば」とまで歌つた藤原道長も、われ／＼が平常ふんだんに使つて居る砂糖の味は知らなかつた。そんな遠い昔の人を引出すまでもなく、われ／＼の一代前の先輩は、ラヂオは知らず、飛行機も知らなかつた。



それを思へば吾々は幸福でなければならぬ。しかし吾々は尙満足はして居ない。まだ／＼何か或る新しい智識を得ようとするのである。莊子に

「吾が生や涯あり、而して知や涯なし。涯あるを以て、涯なきに随ふ、殆きのみ。」

とあるが、實にその通である。知らうとする欲求は大であり且盡きないとしても、吾々の生命其者に限度があつて、それらの欲求を有つたまゝ、竟に生命を喪うことゝなつてしまふのである。

二

斯様に智識を求めても、わが生涯を盡して尙求めきれぬとなると、吾々はどうすればよいか。莊子の如く

「善を爲すも名に近づくことなく、惡を爲すも刑に近づくことなく、智に縁りて經と爲さば、以て身を保つべく、以て生を全うすべく以て親を養ふべく、以て年を盡すべし。」

として、平然この外界に對して出来るだけ無關心で居られるであらうか。老子も亦

「智を絶たば憂なし。」

と言つて、この智識に對する欲求を阻止しようとして居るが、吾々は果して克くこの眼を塞ぎ、この耳を塞いで、一切の見聞から遠ざかることを爲し得るであらうか。

吾々の得ようとする智識は、唯生きて行くといふ爲ばかりでなく、その外の智識を索めようとするのである。それは何であらう。吾々は元來この生きるといふことに焦慮して、之が爲にあらゆる智識を得ようとするが、生きるといふことは、單に物質的にこの身を養つて行くといふことだけではない。唯この身を養ふといふだけならば、或は簡單に出来るかも知れない。が吾々には人といふ矛盾がある。だから人らしく生きる、人として生きることが望ましい。そこに新しい悩みがある。孟子には巧にこの點が道破されてある。即ち

「一簞の食、一豆の羹も、之を得れば嗔ち生き、得ざれば嗔ち死す。嗔爾として之を與ふれば、道を行く人も受けず、蹴爾として之を與ふれば、乞人も屑しとせざるなり。」

と。この僅かの食物がその命の存否に拘るほど切迫した場合でも、與へ方の如何によつては、それさへ受けようとする。是れ全く人たる矜持を傷けるからである。生命は何より大切とはいふが、生命以上のものがあるのである。

三

人が生きるといふことゝ、人としての矜持といふものとは、必ずしも一致しない。この矜持を捨て、唯生きて行くといふことで、何の不満も感じないとなれば、或は一種の幸福であるか



佛像奉彫に就いて

彫刻家 山本瑞雲

私は佛像を奉彫いたしますのに作家として最も大切な事は作家自身が佛に對して熱烈な絶對の信仰を持つ可き事と思ひます。昔の大佛師の傑作である有名な大小の佛像を拜する時私達は自ら頭の下る事を、否下げずには居られない程の心持になる事に今更の如く驚きます。其れは單に彫刻自體の威力に壓せられるのみではなく作家自身の抱いて居る強い信仰力の現れに依るものと私は考へるのであります。依つて何を置いても強い信仰を持たねばならないと思ふのであります。

も知れない。莊子に

泰氏はその臥するや徐徐、その覺むるや于于。一は已を以て馬となし、一は已を以て牛と爲す。

とあるやうに、牛馬と同じものと考へれば、何のこともないであらう。乍併人たる以上は、矢張人としての面目を保ちたい。それは唯他人に對し、世間に對してではなく、己れ自らその自覺を失ひたくない。この矜持を失はずに生きて行くことが出来れば、何等文句の言ふべきものは無い。しかし是がなか／＼容易に出来得べきでない。生を採らんか、生以上のもを採らんか、人は往々岐路に彷徨するであらう。この儼みで竟に生命の破産を齎らすのである。是まで来ると、その求める智識は更に一段の向上を見せて、人とは何であるか、人生とは何であるか、將又この宇宙とは何であるか等々を採らうとする欲求となつて来る。茲に哲學が生れ、冥想内觀の工夫を凝らすことになる。しかし吾々が單に生きて行くといふことでさへ、その智識は容易に得



以上の心から

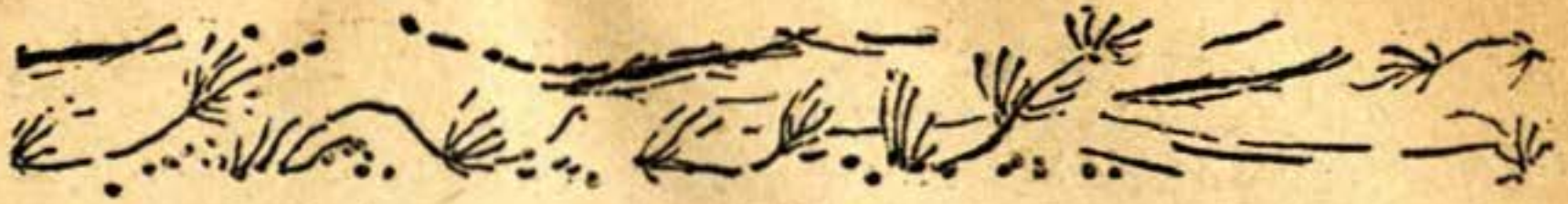
私は佛像奉彫に當り常に其の木材の大小に拘らず最初に木供養をいたす事を怠る事が出来ません。又毎日起床時就寝時の讀經と仕事に取掛る前の寫經も日課として休む事が出来ないであります。佛師はかくある可きだと堅く信じて居ります。此の心と製作態度が自ら運刀の上にも大に配きかけるのであります。

私は嘗て某寺の本尊（大は御佛體のみで九尺もあつた事があります）を奉彫いたしました但其の都度製作中の寫經を巻物に作らせて御體内に納めました。が例へ様もないすがくしい心持ちであります。

私は常に佛像を奉彫いたして居りますが其れは佛に命ぜられての奉彫である。と私自身信じて刀を運んで居るのであります。

（寫眞は共に瑞雲師作の尊像、寫眞前列右に經卷を持てるが瑞雲師）

られないのに、かゝる重大な問題となつて來ると、愈々以て之を獲得することが困難になる。さうかと言つて是處まで進んで來た自分であるから、之を欺いていゝ加減に捨置くといふことも出来ない。煩悶懊惱のどん底に投げ込まれるやうな心境にならないとは限らない。惟ふに斯かる問題は、經驗以上であり、實驗を超えたもので、謂はゞ智識以上である。之に對して何等かの解決をなし得て、安らかな心を持ち得るとせば、それは即ち悟りである。古聖先哲の物靜かな心境、落着き拂つた態度は、智識の所産でなく、全くこの悟りの生んだ境地である。斯かる悟りは如何にして得られるか。澄心靜坐か、坐禪入定か、何れにしても物我一體生佛一如といふが如き達觀の把握である。これは到底何者を以ても證明し得ない所で、唯々體驗心得の外はない。凡百の解説論も何の甲斐もない。斯うなつて來ると、凡庸の者では到底期し得ない高い所遠い所のものとなつて、假令如何に焦躁を重ねても、達し得ないのである。茲に又



新しい悟が生れることゝなつて、所謂智識あるものゝ悟みである。「文字を知るは憂の始」といふ諺があるが、正にこれを謂ふのであらう。

四

世に宗教の存する所以は實に此にある。自ら求めて得られない悟りを、人の力に頼つて之を得たと同然の境地に達するのである。即ち斯かる大悟の域に達した哲人の慈悲を蒙つて、吾が一切を取り捨てゝ之に信賴するのである。信ずるとは任せることであり、吾自らを放棄することである。己が力の及ばないことの自覺に由つて、吾自らを棄てるのである。是に由つてその悟りの境地を味ひ得て、始めて總ての懊惱から免れることが出来る。宗教の効果は、全くこの懊惱からの救ひにある。嚴密に言へば宗教は他力でなければならぬ。法然上人の謙虛の姿を見よ。

我は烏帽子もきぬ法然房なり。黒白をも知らざる童子の如く、是非も知らざる無智の者なり。只念佛往生を仰いで信ず。釋迦は念佛して往生せよと勧め、彌陀は念佛せよ來迎せんと仰せられたり。此の一事を信じて餘事を知らず。

わが身には何ものも有たず、唯ひらに信ずることによつて、悟りの域に到達せられたのである。他力の意を示されたのは、

源空は殿上へまゐるべき器量にてはなけれども、上より召せば二度までもまゐりたり。これはわがまゐるべきしなにてはなけれども、上の御力なり。

とあつて、全くわが力を認められて居ない。キリストの言葉御心のまゝをなしたまへ。

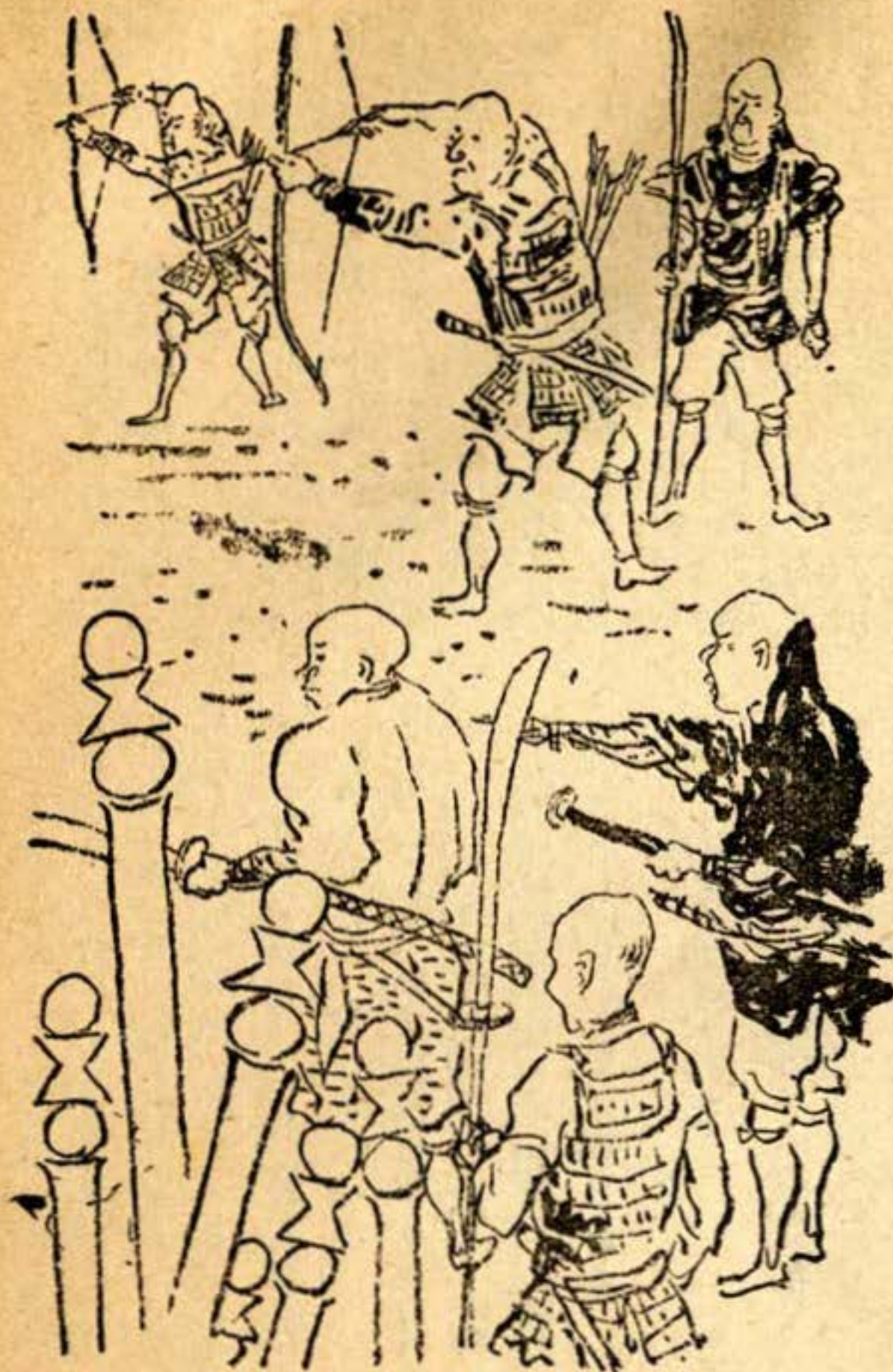
とあるのも、この強い他力を信じて之を打まかす心である。斯やうな純信の姿は、世にも尊い極みである。知らうとして知り得ず、悟らうとして悟り得ない者には、この外に悟み免れる道はない。

世が進むにつれ、智識はいやが上にも増して行くが、それは唯生きて行く爲のものではなければ、悟りへの道程に過ぎぬ。わが身に之を受込むとしても、結局未完成な吾の修飾となるばかりである。でも唯それで満足して行き得る者にはそれまでである。満足し得ない者、心の安らかでない者は、何としたらよいか。深く先哲の身を以て示された尊い經驗に鑑み、その言葉を信じてわれを打任す外はないのである。

法然上人はふねんしやうにんを
めぐひとひとる人々

甘糟太郎陣中記あまかすたろうじんちゆうき

中村 康隆



とむらひばなし

初冬の武藏路のうら寒しく、夕焼け空の明るさも薄ら消えになつて、びいひよろ ひよろ ひよろ、と輪を置く鶴の鳴く音も、木枯しの風も身に沁む夕暮を、低唱に、なむあみだぶ なむあみだぶ、と口吟みながら、身軀川の支流志戸川べりの、足にまつはる萱草徑を、ひたすら急ぐ六人の旅僧の姿が見えた。
やがて、彼等は、寒々と秩父の山脈を照らす月光を浴びて、那珂郡甘糟の里（今の埼玉縣児玉郡松久村甘粕）に著いた。
「これは諸國修行の僧にて候が、甘糟殿の邸と見受け、一夜の旅宿を許されたく御願ひ

申す」と申入れ、そして、取次の下人から、
今宵は亡き主、甘糟太郎忠綱が菩提のため、
念佛を営めるも、些か法師の憚りあれば、と
聞いて、

「御心いみじうこそ。さりながら、こは、去
んぬる八王子山の合戦に甘糟殿に馳せ向ひ、
その御最後の奇特に感じ、かくは發心、念佛
專修となりし輩にて候へば、おして弔はさ
せ給へかし」とて、やがて懇ろに一七日の回
向をなし、その身の因縁を懺悔したといふ。

聞けば、この六人こそ、去んぬる建仁三年
十月十五日、日吉八王子の社壇に立籠り、寄
手の學衆(學僧)・官軍を迎へ敗れ去つた堂衆
(僧兵)の者にて、木戸口に近く攻寄せける甘
糟に十八人して討つてかゝり散々に戦ひて或
は討たれ或は傷負へりし中の生殘る六人であ
つた。忠綱も遂に矢つき刀折れ力も盡きて今
は最後よとて討つに任せし血塗れ姿を西に向
け、かねて覺悟の具足の下に著込みし袈裟も
朱に染めなして、南無阿彌陀佛々々と唱へ
つつ命終せられし有様は、目を瞠るかす許り

にて、流石に猛猛しき山法師も、甘糟が最後
の見事さに、三寶に仕ふる我が身の所業の淺
間しさも顧られ、罪障の餘りの恐ろしさ恥
かしさに、本坊へ歸る心も失せて、そのまゝ、
我身と甘糟が菩提を願はんと、念佛專修とな
りたりし姿ではあつた。

いでや、むくつけき山法師をかくは轉心せ
めつる妙好人、甘糟太郎忠綱が、武人に相應
しい陣中最後の有様を、その心根のそこばく
の道程を、しばし、とむらひ語らしめよ。

山法師さわぎ

甘糟が陣没の日時に關しては異説が存し、
源平盛衰記には、治承二年十月四日とする。
觀山堂衆學徒爭諍して、同年八月學衆は西塔
東谷大納言岡、堂衆は西塔北谷東陽坊に陣し
て争ひ、九月堂衆近隣の賊衆を集め數千の勢
を具して坂本早尾坂に城郭を構へるに及んで
益々大事となり遂に學徒の奏請に依り院宣下
り、此の日、湯淺宗重を大將に三千餘騎を副
へ學衆と共に押寄せ反つて敗れた日で、手負

は數知らず死者二千餘人と記してゐる。續群
書類從卷一六六所收小野氏猪俣系圖(武藏七
黨系圖とも)には、甘糟野二郎廣高が子、太
郎忠經、法然上人の弟子となり治承二年八月
山門衆合戦に討死す、とある。

堂衆といふのは、もともと出家した名門貴
族の子弟たる學衆の從人達の數を待んで團結
せる者で、此の二者の流血の紛争が官兵出動
の騒ぎになつたのは、翌年の四回と都合五度
の治承年間の出兵騒ぎと、建仁年間(のそれと
が知られてゐる。九卷傳五、拾卷傳六等が建
仁三年十一月十五日(勅修御傳は建久と誤記)
とせるは、後の時期と見るものであらう。然
らばその日附は史書の指示に従ひ、建仁三年
十月十五日と訂正されてよい。此の日の戦闘
も治承年間のそれに劣らぬ激戦であつて、東
鑑卷十八、同年同月の記事にも、
「廿六日、辛酉。京都より飛脚參著し、申し
て云く。去る十日、觀岳の堂衆等、金子山(八
王子山に同じか)を以て城郭として群居する
の間、同じき十五日官軍を差遣はして之を攻

めらるゝに依て、堂衆退散す、云々。葛西四郎重元、豊島太郎朝經、佐佐木太郎重綱以下官軍三百人、悪徒の爲に討取られ訖んぬ。伊佐太郎、熊谷三郎等、先登に進む、云々。(同)じき十九日、五畿七道に仰せられて梟黨等を召進むべきの由宣下さる、云々」とある。

先の治承年間、平氏に依る出兵が五度乍ら失敗してゐるので、源氏の名にかけて奮戦した様も伺へて面白い。それに頼朝は、寺院の兵力は封ずる方針であつたから、これは又な

き大掃蕩の好期でもあつた。

その上、この度の擾亂は、近江國の住人、五家次の謀計煽動に起るとされ、翌元久元年の伊勢平氏の反亂も之と係りがある。鑑五は、伴四郎兼光の後胤で、伊勢平氏の一

黨たる富田の進士三郎基度が輩なのである。

反亂の伊勢平氏は同年四月平賀朝政の追討に滅び、延暦寺堂衆の殘黨も、明月記等に依ると、同年正月廿一日近江守護佐々木定綱勅を受け追討、更に七月廿二日殘餘を追却して居り、八月廿九日には餘黨梟云なる者の遠流さ

れたことも見えてゐる。その間、鑑五は巧みに潜伏したが、遂に建永二年九月五日に至り中原親能の爲京都白河邊で捕へられ、次で鎌倉に護送、十月二日處刑せられたといふ。

武藏國の御家人、猪俣黨の一人、猪俣小平六と並稱されし甘糟野次郎廣忠が一子、後の承久兵亂の勇士同姓小太郎光忠、同小次郎(東鑑に見ゆ。小野氏系圖にはなく不明)が父、甘糟太郎忠綱が最後の時は、もとより、此の時でなくてはならぬ。

今宵限りの生命

事の發端、背景が何であるにせよ、建仁三年十月頃の京都は、戦雲しきりに動いて、初冬の風も身を切るかと鋭く感ぜられた。

叡山、坂本のあたりは、人目には暮色に包まれて靜けく眠るかと思えたが、そここの山陰谷川に血を洗ひ骨を碎く争ひが續けられてゐたのである。

何でも此の五月頃から學衆と西塔釋迦堂衆とが争ひ出し、そして八月一日になると、學

徒は城廓を東谷大納言並に南谷の走井の坊に構へて堂衆を追却けたので、同六日堂衆は近江三箇庄の庄官勇士達を語らつて之を攻め、双方死傷無數、そこで七日院宣が下り堂衆先づ退散し、學徒も十九日には下洛したが、その爲め廿五日座主實全が辭職し眞性代つた所、之に不服なのか、廿八日復又學徒蜂起し本院の學生も同心して入京し、靈山長樂寺、祇園等に群居擾亂を起すといふ騒ぎ(眞性はその爲一時辭任し十月廿七日になつて勅に依り復職してゐる)。遂に十月三日には平賀朝政が京都の警衛についたが、十日には堂衆が亦も坂本日吉八王子の社叢を城廓として、嶮しき坂道には逆木を引き、岡には大石を並べて石弓を張り、宛ら治承年間の擾亂を再現してゐたのであつた。

官兵出動の噂は巷に喧しく、自然、武士達の氣も荒けなくて、今日を一日と酒に歌舞に騒がしき夜々も多かつた。

甘糟太郎忠綱は、今宵の酒宴を逃れて一人闇の夜に疾り出でた。愈々明日にも出動とい

ふ前夜のこと。

みなれ木の、水なれそなれて離れなば、

戀しからめや、戀しからじや。

白拍子の唄聲も、故郷の山河妻子を想へと

ばかり響くのであつた。一身驅川々々、小太よ

く」と呟きながらも彼の瞳に滲むもののあ

るを感じた。もとより峻嶮な坂道、堅固な城

塞に籠る、幾度か平氏の兵を蹴散らせる強者

共を相手とし、再び生きて歸らざる覺悟はあ

る。秋草の山路に屍を晒す武門の面目を壽ほ

ぐ心はある。祝盃を重ねて我身の武運を歡ば

うとはするが、今宵限りと思へば流石に酔ひ

がたく眠りがたなき夜ではあつた。更けゆく

夜半の寒風に肌をひやして宿營近き河原面に

佇みつくす忠綱であつた。

念佛一路

ここ、大谷の禪房、未だ晴れやらぬ曉闇の

中に、今し、落葉かく簀の手を止めて、山門

の騒擾のことども心憂く語らふ弟子僧は、や

がて憂然と響き来る駒の足並に氣付いた。こ

れはと訝る暇もなく、忽ち卑しからぬ具足姿

の武者一騎、三條河原邊より一散に驅け来る

や、門前に駒を驟くよと見る間に、つかく

と歩み寄り、

「是は武藏國の御家人、猪俣黨の甘増太郎忠

綱にて候。堂衆追討に催されて唯今坂本に

龍り向ふ途すがら、卒爾にては候が、今生

の大事承りたく、かくは推參、何卒お取次

よしなにと、言葉短かながら、身も心も眞

一筋に縁先にと跪いた。

やがて上人に目通りした彼は、顔を輝かし

心底を披露して、幾夜さの眠られざりし疑

のほどを質すのであつた。

武士の常、もとより生還は期せざるも、唯



だ修羅閻魔の巷に殺戮の限りを盡くして失せんは、弓矢の道にも叶ひ父祖の遺願をも保ち子孫の後榮をも残すべけれど淺間しき三惡道に沈み果てん所業ならずや。果して戦場の闘争に生死を離れ淨土に生るる道の許されたるや。受け難き人身を受け遭ひ難き佛法に遭ひまつれる今生の最後に、心得べき一句承りたし、と武人の最後の懺みの程を、口ごもり口ごもり述ぶるのであつた。

上人は聲もすゞしく「いみじくも問ひ給ふよ」とて、懇ろに教へ訓され、淨土への往生は、戦場に死すると病床に亡ずるとに依らず、唯だ念佛一行のみに依る。我等末代の罪惡生死の凡夫に何の行善、何の行法があらう、唯だ彌陀の本願不思議を信じ念佛申しゆくこそ我等に適ふ眞の生き方なれ。戦ふも糸紡ぐも、唯だ今の世には難有き淨土へと往生せんずる、念佛の姿にてあらまほし。縦ひ軍陣に戦ひ刀槍弓箭に命を失ふとも、念佛だに申すならば本願に乘じ來迎に預りて往生せんことゆめゆめ疑ひ給ふな。と申せば、甘糟は「うさ

ては、忠經が往生は今日一定なるべし。今は不審ひらき侍りぬ。ああ、いみじくも生れ來つるよ」とうち歡び、尙ほ一期の形見とて上人の御袈裟を賜つて鎧の下に著なしつつ、心の駒も勇ましく、念佛一路、坂本さして馳せ参じた。

散るは夜露か

かくて八王子山の城塞に攻登り、念佛諸共、木戸口に打つてかゝり、十八人の荒法師を敵に、甘糟は戦場の露と散つたのであつた。

いまは、夢の跡ともなつた戦場に、やがて、ほの暗い夕闇がひろがつてきた。踏みしだかれ血潮に亂れた草蔭に啼く虫も凄じい山道に、比叡風の風も寒々と、今し東山の端を昇る満月の光りも、人の世の無常を照すかと思えた。

この夕べ、緣行道せられてゐた上人は、折簡侍れる摩訶部の敬佛、角張の淨阿を召し、坂本邊に瑞相望まるゝは必定甘糟の往生しつると覺ゆるとて、淨阿を派して、甘糟が最後

の程も見届け屍の處理をもなさしめられたので、淨阿足疾く坂本に立越え來て見れば、嶮しき坂道に血は川をなし死屍は山なす腥き戦場に、十五夜の月もさしそめ、命も細く啼く虫の音も寂しき中を、あなたこなたと尋ね廻つて、木戸口近き草蔭に泣き崩るる者を問へば、今は亡き主の死屍にすがりつく甘糟の下人であつた。見れば、具足も顔も朱に染り、身に負ふ矢羽根の數も刀槍の傷跡も、力の限り戦つて矢盡き刀折れ、現し世の露と散り果てた姿と頷けるのを、尙も近寄り抱き起せば、馬を捨て徒歩立となつての斬込に兩膝を薙ぎ取られてくづ折れし儘に、西向に倒れ伏して、胸元固く掌を合せ結んで居り、鎧の下に纏うた袈裟の木蘭色も血潮にぬれまがうてのぞき出てるるも哀れであつた。

散るは夜露か、そよぐは草か、軀軀は失せて甘糟が魂は尙ほ、啼く虫の音に誘はれて、南無阿彌陀佛と、靜ひなかる淨土への路を稱へゆくかと、想はへた。



僧侶は社會の中へ

防毒應急面を發明した伊藤戒圓師

本誌記者

チエコ問題から獨逸と英佛間の關係が緊迫したと見られた時ロンドン、パリ等の市民が政府から防毒面を支給されたと云ふ新聞記事が見られた。それ程近代戦に都市空襲は附き物であつて、だから戦線では勿論のこと、

後方の都市に於ても空襲の恐威に對抗し得るためには防毒面の必要なことは殆んど絶對的なのである。(カッパ寫眞は應急面製作講習で

伊藤戒圓師)

ところで、この防毒面たるや、それ程重要なものであるのに、我が國でも東京その他の重要都市に必要な數量だけ備へると云ふことがそう早急には實現

しさうもないのである。各家庭に防毒面をその人員だけ備へやうとは誰れでも望むところだが、種々な關係からその普及の程度は極めて不充分たるを脱れない。

しかも、この緊急の時に際して、自己の發明にかゝり既に新案特許まで得てゐる完全な應急面を、營利的に販賣せず、唯社會の人人々の社福のために、製作法を傳授してゐる奇特な一僧侶がある。東京市板橋區練馬南町五丁目淨土宗寺院稱名院住職伊藤戒圓師がその人である。

伊藤戒圓師が苦心發明された防毒面はいへ



的勞苦の茨の道があつたのである。
以下は記者が直接師にお逢ひして、
控へ目に語られるお話しから綴つた
ものである。

社會のために

「僧侶は單に布施を目當てにのみ生活すべきではない。必ず社會、國家のために、犠牲的に活動しなければならぬ。」

それが伊藤師の日頃の信念であつて（それに就ては後述する）練馬方面委員として、その信念の下に寧日なき奮闘を續けてこられたのであつたが、偶々國際關係の緊迫と共に空からの都市襲撃防衛が日常の問題となつて來るにつれて、家庭防衛面の必要が焦眉の急となつて來た。

伊藤師も家庭用マスクの必要を痛感し、兼ねてからの知己であつた國防化學研究所指導員福島延太郎氏にマスクの製造を依頼しておいたが、その間、支那事變の勃發となり、福

島氏からは「〇部の御入用に就きそちらの注文は御延期願ひ度い」と云ふ通知に接した。

そこで師は

「こんな事で急場の間に合ふ筈はない。」

と云ふ疑問を持たれるに致つた。更に當時、防衛面を購入するには最低價格が六圓五十二錢、それでも自分の家族三四人分だけのものなら買つておくことも出来るが、これだけのものでも買ふのに非常に困難な人達が澤山あるに違ひない。自分が方面委員として、カードを扱つてゐる貧困者の家族だけでも八十所帯、人員にして三百人はある。一體この氣の毒な人達が全部マスクを備へることが出来るだらうか。萬一それが不可能としたら、空襲の際にそれ等の人達が蒙るであらう慘害は想像に餘りある。

「どうかして、さう云ふ人達にも行き渡るやうなマスクが欲しいものだ」

日頃の信念は師をしてかり云ふ急願を起さしめずにはおかなかつた。

そこで伊藤師は國防化學研究會の發表する

リット以外の毒ガスの中なら、繼續六時間使用に耐へ、製作材料費は一個一圓内外、しかも機械を使用しないから、家庭内で、女手でも立派に出來上ると云ふ至極簡便有効なマスクで、一般家庭用としては先ず申分のないものである。

これだけの使用價值があり、新案特許までも得てゐるこのマスクを、營利的目的に利用せず、講習會を通じて、その製作法を一般家庭に傳授しつゝ、防空思想の普及に目覺しい活動、涙ぐましい精進を續けてゐる伊藤師の背後には不撓不屈の信仰の力があり、またそこに至るまでの筆舌に盡し得ない精神的、物質

應急面の使用を思ひ付き、これなら誰れにでも簡単に使用出来さうであるが、その應急面製作に一番肝心な活性炭素は高價でもあり、仲々手に入り難いもので、それが間に合はなければ佛作つて魂入れずの結果になるから、この活性炭を個々人で作れるやうにしたら、應急面の普及は一層行渡り、人々の利益するところも大きいであらうと考へた。

さう云ふ考へから師は先に述べた知友福島延太郎氏を招いて講師とし、貧困な人々のために活性炭素製作講習を開いたのであつた。

マスクの製作へ

ところが、その講習會の席上、福島氏と伊藤師とが不計も意見の衝突を來たしてしまつた。と云ふのは例の應急面ではガスの効力を中和すべき活性炭素を充填する部分を呼吸が行き來するために肝心の活性炭素が濕つて仕舞つて、効力が減少する恐れがあることを伊藤師が指適したからである。

そのことがあつてから、伊藤師は空襲の恐

威から同朋の生命を守るためには、どうしても簡単に、しかも充分使用に堪へ得るマスクを作らねばならぬと決心した。決心したからはそれを自ら實行せずにはおられない師は、凡ての障害を克服して、その道に没頭したのであつた。

伊藤師の夜の目も眠ずの精進が始まつた。

もとより身は一介の僧侶であり、マスク製作にはずぶの素人のことゝて、凡てが先づ初歩から手を着けねばならなかつた。困難は最初から待ち構へてゐた。

然し師は福島氏に援助を仰ぎつゝ屈せず初志の貫徹に邁進して行つた。眠らざる夜は數度も續いた。

自坊にさゝやかな研究室を作り、手工業的な氏のマスク製作は日を夜ついで行はれたのであつた、作つては壊し、壊しては作り、「幾度かつまずきました。失敗の連続でした。どうして自分は、こんな仕事を始めたのであらうかと、全く泣き度いやうな目にも幾度か逢ひ途中で投げ出さうとさへした事がありました

しが、その度は心に鞭つて、やつとこゝまでやつて來たのです。」

と師は感慨深く云ふのだつた。

然し完成を見た今日では、それらの痛ましい失敗こそ成功への一里塚であつた。國家、社會、同朋のために身を犠牲にすること僧侶としての本分であると云ふ師の鐵の如き信念がこゝに至らしめたのであつた。

一念發起

伊藤戒圓師をして幾度かの座折、過重な物質的負擔にも屈せしめず、目的達成に邁進せしめた斷乎たる信念には、實に鐵の如き信仰の裏付けがあつたのである。

師は大正二年三浦半島の某寺に住職となつたが、米十俵内外の上りの田地と三十軒足らずの檀家しか持たぬその寺院で、一家の生活を支へるのは極めて困難な状態にあつたので生活のためにはどうしても葬式寺役による布施に俟ねばならなかつた。

然し、その生活の中に、師に一つの大きな

疑念が起つて來た。自分は寺院で生活するた
めには布施を仰がなければならぬ。だが死
者を出した例の檀家の人々の身になつて見た
らどうだらうか。自分が妻子を喪ふのであつ
たら、その悲痛は如何ばかりであらうか。か
やうな人の悲しみを目當てにして生活してよ
いものであらうか。

釋尊は王子と云ふ尊い身分にお生れになり
ながら、遂ひに出家して悟りを得られたこの
佛のみ教がかやうに安易なもの、人の悲しみに
頼つて生きる情けないものであつて良いの
だらうか。このみ教とこの現實、それは確か
に大きな矛盾である。自分は宗祖の教へに従
つてゐないのではあるまいか。――

この大きな矛盾の中に苦しみ悩んだ師はそ
こで一切を放棄して、三經をひもとき、念佛
精進にその矛盾の解決を求めたのであつた。

「その時佛、長老舍利弗に告げたまはく、こ
れより西方十萬億土を過ぎて世界あり、名付
けて極樂と云ふ、その土に佛あり、阿彌陀と
號す、今現にましまして説法したまふ。」

と阿彌陀經にある通り、今現にまします佛な
らば逢へない筈はない。それは三毒の煩惱に
妨げられてゐるからである。み佛におすがり



申して、三毒の煩惱を去つたならば、「現にま
します佛」にお逢ひ出來ない筈はない。

かくして師は念佛三昧の生活に没入して行

つた。或る時は山に分け入つて念佛申しつゝ、
眞を求めた。伊藤師は記者に三十數本の折れ、
破れて使用にたへなくなつた木魚の梵唄を示
された。それは一念發起して以來五年間の精
進の跡を示されたものであつた。

師がその精進の結果體得せられたところの
ものは記者の筆を以つて描くことは許されな
い。然し、結論すれば、國家、社會の幸福のた
めに一身を犠牲にすることこそ僧侶の本分で
ある。布施を求めることのみに僧侶の仕事で
はない。現在に安住する處に道があるのでは
ない。一身を捧げてこそ僧侶たる本分を盡す
ことが出来るのである。しかもそれを理論と
してではなく、實行として示さねばならな
い。(本會婦人部講習會記念寫眞中央が伊藤師)

師が仕事に熱中する時、家族の者が不平を
こぼすのを聞かれると、

「布施を貰ふばかりが坊主の仕事ではないぞ」
と叱咤するのであつた。

この信念、この信仰を堅持して、師は目下各
方面に防毒面普及のために活躍されてゐる。



比田健夫画

荒井 新作・大羽比羅夫畫

二

張を憂鬱にしたのはそんな事ばかりでもなかつた。その頃將軍の軍隊は満足な食糧や給料が與へられてなかつたので、兵士等は匪賊のやうに平氣で切盗りをやつてゐた。そこでこの街の商人達は自警團を組織して武器も盛んに買ひ込み、兵隊達を壓倒して街の秩序を維持するやうにさへなつた。そして最近では自分達が將軍の默認のもとに組織された義勇軍であることを忘れて、將軍の軍隊をこの街から追ひ出さうなど、言ふ大それた考へを抱くやうになつた。張濟堂は、かうした認識不足の考へ方が、きつとこの町に災難を起すのだと固く信じてゐた。

あれやこれやと考へて彼は全く氣をくさくささせながら自分の居間に行くと、義勇軍の立派な軍服に着替へた。張の堂々とした體軀は、軍服を着ると中々颯爽として、自分ながら惚れ惚れする程だつた。金ボタンの上衣、廣幅のなめし革のバンド、艶々と光澤のある長靴、モダンな軍帽、などを身につけると、彼は銃を執つて二三步家の中を歩いてみてゐるうちに、張はこれは商人のすることじやないと歎息をついた。

だが、店頭に出て店の中の大きな鏡に自分の立派な姿が映つた時、張の心はさすがに浮々として來た。彼は「明」と娘を呼んだが返事がないので、また不貞くさつてゐると黙つて街に出た。そして街の公會堂へ出かけようと歩いて行く

と、向ふから娘の明と福の仲の泰安が手をとらんばかりに、面白さうに話しながら来るのを見たので彼は思はず。

「馬鹿者！」

とどなりつけた。明と泰安はコソ／＼と路地へかけこんでしまった。

張はいらいしながら複雑な氣持で公會堂へ行つた。今日はそこで義勇軍の集會があるのだ。公會堂は緊張した人々で殺氣立つてさへ見えた。各々がお互に過激な意見を聞はしてゐるのを聞くと、張は心のうちがすつかり暗くなつてしまつた。こいつ等はみんな若いのだ。おまけにすつかり昂奮しきつてゐる——さう思ふと張は來なければよかつたとさへ思つた。こいつ等と來ては、太鼓や旗差物を押し立てて街を練り廻つて、それから寄附金で飲み食ひして勇ましさうな演舌さへすれば、兵隊の掠奪を防ぐことが出来るかと考へていやがる。將軍に反抗して軍隊を市街から追拂はうと言ふ氣狂ひじみた計畫だけは是非停めなきあらぬ——張はさう思つた。

「やくざな將軍の兵隊に軍資金を供給するのは我々商人なのだ。それなのに將軍は何だかんだと新税を作つて俺達を食ひつくしてゐる。もう我々はビター一文も出せないぞ！ 今日こそ自分達を護る日なのだッ」

義勇軍の若い細面の隊長はさう絶叫した。

「さうだ！ さうだッ」「やれッ、やれ」會堂の方々から昂奮した聲が舉つた。張は今こそ自分の意見を述べる時だと思つたので、彼は立上ると氣の進まぬやうな口調で言つた。

「皆さん、私の言葉も是非聽いて頂きたい。

皆さんは虹を見てゐるのだ。私たちの鈍な頭ででつち上げた虹を本當の美しい天の掛橋だと思ひこんでゐる。しかし、虹は虹だ。どんなに美しくてもそこへは昇れませんよ。殊に我國の昔の聖人はかううたつてゐるじやありませんか。「蜺蜺在東、莫之敢指」とね、もし虹が東に出たら何人かはばかつてこれを指しやしない。相手としないことです」

張はそこでしばらく言葉を切つた。すると「娘の賣りそこね奴！」

とか娘、明とか言ふ言葉がどよめく喚聲の中から張の耳に入つて來たが張はかまはず言葉を續けた。

「もし兎が狐に向つて戦ひを挑んだとしたら、血塗みれになつて倒れるのはどちらでせうか」でも人々はやかましく騒ぎ立てた。張は一段と聲を張り上げて、

「遺憾ながら、現在の義勇軍はたゞ軍服が綺麗ただけで、何の役にも立たないことを考へると、私はこの際脱退することにしました」と言つて腰を下した。若い隊長はこの言葉を耳にすると、顔を眞赤にして壁に飛び上つた。

「今更辭職なんて、絶対に駄目だぞッ！ こんなことが流行つたら、どうして勝てるのだッ」と叫んだ。

「その戦ひなら、どうしたつて勝つてつこないんだよ」

張はやり返した。

「昔の聖人はうまいことを言つたものさ、三十六計逃げるに如かずつてね。とに角わしの

この上等の鐵砲は誰でも欲しい者にやるよ」張は鐵砲を投げ出すとそそくさと公會堂を出た。

その夜張は、娘の寝靜るのをまつて眞夜中に、そつと起き出して軍服や武器などの義勇軍に關るものを、床下の煉瓦の下に全部埋めてしまつた。かうして物的證據を無くすれば、誰が何と言つても義勇軍にゐなかつたと否認することが出来るし、將軍の殘忍な復讐も免れるぞと彼は考へたからだ。

三

二三日の後、張の惧れてゐた災難が到々起つた。將軍は義勇軍の行動を知つて見つけ次第に義勇兵を逮捕し、武器や彈藥を取上げた。義勇軍の一部は、路地々々にバリケードを作つて對抗したが、間もなく夜になると街には火が放たれて、街は黄色い焰が天を焦がして、この街の狭い路地を人々は右横左横に逃げまどつてゐた。火の手が下火になるとこんどは將軍の軍隊の掠奪が初つた。

張は證據品を埋めたお蔭で、捕縛を免れたし、幸に火災にも會はなかつたのが幸と言へば幸であつたが、店の品物はのこらず掠奪されてしまつた。張はその位のことは我慢出來たが、娘の明がその日の夕刻から姿を消してしまつたことは、張にとつてはこれ程大きな心配は今だかつて経験したことがない程だつた。張は氣狂ひのやうになつて、娘の名を叫び乍ら路地のあちこちを走り廻つてゐた。だが張は、街の兩替屋のたゞきこわされた扉や空になつた金箱や、料理店や娼家の踏み荒された荒涼たる有様をむざ／＼と見せつけられただけで、誰に聞いても明の消息は分らなかつた。

「ひよつとすると、將軍の奴が？ いや／＼そんな事はないはづだ、だとすると泰安と……」

張はそれからそれへと考へが絶えなかつた。向ひの李福の家はすつかり焼け落ちて福がぼんやりと立つてるが伴の泰安が見えないとすると、やつぱり泰安かなと張は格子の中

から路の向ひ側をじつと見てゐた。

あくる朝、張は再び娘を求めて街に出た。

そして寺の方へ行つて見た。すると寺の中庭で四五人の兵隊が掠奪して來た黒檀の家具類を山の様に積み上げて、苦力や行商人、下女などを相手に競賣してゐるのを見た。彼等はこんな豪華な家具などを一生かゝつても買ふことが出来ないのに、兵隊が銅貨數枚や小銀貨一枚位で惜氣もなく賣放つてゐるのを見て、争つて買ひ込んで、目を輝かせ乍らその家具を背中にしよひこんで歩いて行つた。張が彼等の嬉しさうな顔つきを見ると、すぐ近所に待ちかまへてゐる別の兵隊がその家具を再び掠奪してしまふことを、到底教へてやることは出来なかつた。張は半時間ばかりの間に、同じ戸棚が三回も賣られてゐるのを見たのだ。それを知ると彼は兵隊の餘り圖々しいのに、娘の心配もひよつと忘れて思はず笑つてしまつた。

だが、張がこの中庭から寺の正面の廣場へ歩いて行つとした時、邊りが急に騒々しくな



つて、人々が寺の
 廣場へかけて行つ
 た。張が何か悪い
 しらせでもあつた
 時の様に、ドギマ
 ギしながら太つた
 身體を走らせて寺
 の前に出た。する
 と後から張の背中
 をボンとたく者
 があるので、彼は
 ヒヨツと後を向く
 と、「あたし十八
 九の娘が今こゝで
 ズドンと殺される
 んだとさ！」と言
 ひ乍ら李福が出齒
 をむき出しにして
 苦笑ひをしてゐ
 た。

「えッ娘！ 娘だ

ッー」

張は福を突きとばすやうにして、人だかり
 の方に走つて行つた。すると寺に上る石壇の
 上に將軍が脚をまげて少し中腰になつてニタ
 ニタ笑つてゐた。その側には十人位の兵士が
 輪になつて何かぶす／＼話をしてゐた。その
 中には將軍の息子の王龍もあるではないか。
 張は何事だと思つて人垣を無理におしのけて
 前に出ると、

「あッー」

と叫んで將軍の方へ走して行つた。

「明！ 明！ わしだぞッ、分るか分るかッ」
 地べたに突ぶしてゐる女は、たしかに張の娘
 だつた。張の聲を聞くと明はヒヨツト立上つ
 て張に武者振り付いて大聲で泣き立てた。張
 はすでにこと切れてゐたと思つた娘がこの通
 り生きてゐたと思ふと少し氣を落ちつけて、
 娘からそつと手を放すと、將軍のところに走
 つて行つて、石壇のところにくづくまるやう
 にしながら。

「將軍様、どうぞ娘の命はお助け下さいー」

この、わ、わしを殺して下さ……い、このわしを……娘ばかりは何卒……」

張は聲をからして泣く泣く哀願した。だが將軍は黙つてそれを聞いてゐた。がしばらくすると、將軍は、

「奴を引立てて来いッ」

ととなりつけた。兵士が二三人本堂の裏の方へ走つて行つたかと思ふと、義勇軍の服裝を着たやせぎすの男を引立て來た。張は大地に坐つてしまつたまゝ、その男をおやつと思つて、涙で曇つた目をこすり乍ら見なほすと

「あッ」

聲を擧げた。と同時に、

「件だッ」

「泰安だッ」

と叫んで李福が人垣の中から轉び出して來た。

「わしの件に限つて悪いことはしねいだ。人違ひだッ！ 將軍様！ 件だけは助けて下さい」

福はおろ／＼と叫び立てた。人々は残酷な

將軍のことだから、一體何をするのかと思ふと、人ごとでない様な氣がして身震ひをした。張と福とは何時の間にか手を取り合つて、うづくまるやうにして、將軍の動きをぢつと見つめてゐた。明は泰安が來たことが分ると、そつと立ち上つて泰安を見守つて淋しく笑つた。涙も乾きつた眼は澄んで青かつた。艶々した頬も何の血の氣もない様に青ざめて、土色にさへ見えた。泰安は明の淋しい笑ひを受けると何か分つたやうに瞳をかゞやかした直ぐに頭を下げてしまつた。

將軍が再び叫んだ。

「銃をもたせろ、銃をな」

すると兵士達は無理矢理泰安に銃を持たせると、銃口を明の方に向けさせて兵士達は泰安の手を無理に引金におしつけた。泰安はぶるぶると全身が痙攣を起して銃が上下に動揺して動きが止らなかつた。人々がざわ／＼と騒ぎ初めると、將軍はまた何やら叫んだが、人の騒ぎで聞きとれなかつたが、兵士は泰安の食指を引金にかけて、ぐつとまげさせやう

と力んだ。泰安の指は硬直してまるで棒の様に動かない。兵士が二人が／＼で泰安のその指をボキツと折るやうにまげると銃は、

「ドドン」

と煙をはいたが明には命中しなかつた。ただ寺の屋根瓦が二三枚空に上つただけだつたが、泰安がバツタリ倒れてしまつたのだ。やがて明も失神したやうにどつと倒れると、將軍は

「ウワハハハッ」

と大聲を立てて寺を出て行つた。

張濟堂はお經でも唱へるやうに、口の中

「北風其涼、雨雪其霧」

と詩經の句を幾度も幾度も繰返してゐた。

(完)

x

x

x

x

x

x



國島縣 齋藤華舟

自らの手もて作れる新米を食みて
鼓腹し物を嘆かず

(評) 土にたつものの安心と力強さが感じられる作である。

飯田市 宮澤榮子

戦線の夫子が愛でにし秋菊を手入れするなり兒らを守りつつ

(評) 夫を戦地に送つて留守を守る妻が、子供らを育てつつ秋に入つて夫の愛した菊の鉢の手入れをしたながら夫をしのぶ心地にしみじみとしたものが感じられる。

中野區 三浦頼子

わが国のつゆくさの花いとほしみ
咲き咲くままにはびこらせつつ

(評) これは優しい女性らしさの溢れた作である。可憐な雑草にまで愛の及んである作者は敢て抜かうとしないばかりかその花を喜んで眺めてゐる。

横濱市 瀧岸安造

ありがたや朝な夕なに南無阿彌陀

無礙の光の我れを照せば

大阪市 細木麗

我が心罪人のごとおそれつつ君と
對ふる心落るず

靜岡縣 沼田岳潤

深良より富岡へつづく峠道富士は
眞向きに聳えてぞ見ゆ

京都 水田七郎

まだ知らぬ友の文きて教をばわれ
に乞ふなり古都の初秋

大阪 吉廣夏生

苔の路のぼれば古き金堂に秋の日
さしの動かざりけり

岡木縣 大輪清

山深み茸を採らんと我がくれば枝
毎になく秋の諸鳥

小樽 中村毛武

喜びもはた悲しみもちこめてた
なつかしき秋の夜の月

小樽 中村毛武

小樽市 中村もん

出征の兵士を送るとよもしの廣き
港にひびく秋晴れ

新宮市 奥村映水

秋晴れに聲ふるはして空高く靜か
に蘆の輪をかきて舞ふ

秋田縣 鎌田英男

山峽の朝わびしけれさらさらと尾
花の原を風吹きわたる

北海道 寺田頼山

海を抜き雲にそびゆる雄々しさよ
北見が島の利尻不二の根

東京 小泉妙春

雨あがりうららに晴れし秋の日に
干せばかなしき亡き子の晴着

大阪市 渡邊淨泉

故郷に悲しく在す母上よひがみ
もつ子は悔いに泣く

王子區 三野輪江雪

すすきほけ荒野に遠く富士浮かぶ
麓は白く傘雲かゝる

京都市 磯島孝治郎

國まもるみ柱のせてしづしづと車
轡れば心うなだる

千葉縣 高橋美矢子

樺木の葉まだ青けれど散りそめて

木末にもずの高く鳴くかな

飯田市 中山弘

戦友のみ靈なくさめ地藏札流しつ
念佛誦する士ありと(戰場通信)

朝鮮 椎葉球磨

身を清め心をこめて送るなり日本
刀をばもののふため

長野縣 宮澤圭子

靜けさを破りてバタリ蜂谷柿本堂
傳ひ屋根に落ちけり

富山縣 藤田四三九

何を見て笑みつるならん幼兒の寫
繪見つつひとりほほえむ

北海道 花田順住

思ひやれ雨や風にもいとひなく支
那に戦ふすめらもののふ

北海道 中村茂舞

應召の門に立てたる出征旗此の感
激に多く語らず

岡山市 中村護孝

木魚の音聲は佛かわが聲かみ稱名
となふればうさも忘るる

京都市 郡司島誠也

管制の解かれし街の明るさに夜更
けし路に歩み出にけり

投稿規定

官製はがきに一四二首以内
とし「淨土」編輯部歌壇係
あて送ること



淨土の旅

醫學博士

和田正系

長い／＼冬も漸く終り春が参りました。北國にも似たこゝ江州の町にも二三日來温い日が續き空高く鳥が舞ふてゐます。毎日の様に思はぬ日とては無いのですがついペン持つ事も少く意外の御無沙汰をしてしまいました。

病床の生活既に一年有半。頑愚の身にもいつとは無しに心の窓を開いて頂き、苦しい乍らも心安らかに生かして頂いてゐます。只息をするばかり、自らの力では何一つ爲し能はぬ此の身を以てかくも安らかに生かされて、生きて行ける事を思ふ時、もう自己にのみ執着した愚痴はあり得ません。すべてを何物かの大きな力にお任せして生きる外に私に残された道は無いことが、はつきりし

て参りました。未だ若い身です。現世への淡い憧憬を絶ち切る事は尙出来かね、前途を思ふと流石に心淋しく、友の元氣な向上の姿を思ふ時、一人取り残された淋しさは矢張り精算し切れません。

或は再び健康に歸る事は出来ぬかも知れませんが。あらゆる努力も遂に力及ばぬ時、私もその時は心やぶれる事なく運命に随順して行けるといふ氣が致します。よし人の言ふ幸福はもはや此の身には望めなくとも、然し孤獨なればこそ、淋しければこそ、内に自らの心の觀照にはげみつゝ生きて行く事は矢張り楽しい事だと思ひます。

昨年の五月末先生から頂いたお手紙のお言葉「治らなければ死ぬ迄のこと——」まだあの當時のお心持は充分解つてゐる乍ら流石に悲痛に聞えま

戦地の法要

天津 知恩院 山田昇禪

六月十七日の晝過ぎ 電話のベルが鳴つた。

「あゝ、こちらは野間部隊です、今、小杉といふ兵をそちらへやりますから御回向をお願いいたします。」

電話が掛つてから三十分程たつて小杉君はやつて來た。中肉中脊の立派な兵士、青色の襟章に肩章は星二つ、航空一等兵だ。舉手の禮をしながら小杉君は

「自分が小杉であります、今日は亡父の命日なのでお回向をして頂き度いと思ひまして伺ひました。」

「先程隊からお電話がありました、お待ちしてゐました、さあど

したが此頃苦しい悲しい思ひの時、そらだ、治らなければ死ぬ迄の事！と心に叫んではとても清静した氣樂な氣持になります。後略。

三月三日

T・K

二

先生。度々御親切なお手紙頂きまして有難う存じます。今朝ほどは何よりの御本御送り下さいまして厚く御禮申上げます。今までの主人でしたら食事もそこくにして拜見致しますのでせうに、今はそれが叶はず思ひ出したやうに本を撫でまはして残念がつて居ます。

容體も一時はあまりの咯血だつた爲め大變驚き心配も致しました。四日間續けて咯血に襲はれましたが一昨日より血痰が出るのみとなりました。咳が出易く熱は初め卅九度五分でした段々下り今日は朝卅七度五分夜卅八度六分で御座います。食慾は咯血後無くなりましたして一日の量は卵四五個重湯二合ミルク二合その他少しです。

精神は大變落ついたものでございます。之も今日までの先生の御導きと喜んで居ります。命の無き者はそれ迄と諦めても今一度何なり共残して行

きたいと願つて居ります。 三月十日 K 子

三

先生。恐ろしい目にあひました。苦しいです。

こんなに苦しみながら尙且生きねばならぬ事を思ふと宿縁の程が恐ろしうございます。

然し先生、神は決して無用の試練を人に加へはなさいません。逆縁の恩寵といふ事もありませう。浅い私のはからひは此際何物でもありません。大なる御慈悲の前にすべてを捧げ盡してゐます。この苦しい試練の意味を悟り得る日があることとせう。

それからもう一つ、「愛は神である、私は精神的混亂と肉體的苦惱の最中にこの言葉を實にはつきりと體得しました。親を愛し妻を愛し隣人を愛し一般衆生を愛し己が敵を愛する。そして己が敵の最も憎むべき行爲をすら愛し得るのでなくては遂に一人の妻をすら愛し拔く事は出来ません。

實に愛とはそんなにも廣く深いものでした。

先生。若し萬一の事があつても親のため妻の爲めいつ迄も良き先生であつて下さる事を祈ります。三月十一日夜 T・K 代筆

うぞこちらへ」と云ひつゝ私は應接間へ招じた。

讀經が終つて、應接間でお茶をすゝりながら小杉君は靜かに語り出した。

「實は父の死を知つたのが昨日の事なのです。部隊長から聞かされて始めて知つたのです、私は東京市××××の者ですが兄弟もなく父、母を吾が家に殘して出征したのが昨年の七月、以來約一ケ年、所々の戦場にも參加し幸ひ無事で現在、天津に居りますが、その間、常に故きとの父宛にこちらの状況を知らせてゐたのです、家からの返事は二人とも至極健在故懸命に軍務に御精勵下さいといふ便り、ところが先達つての事、妙に母親に手紙が出したくなつたので心を籠めてかいた手紙の中に最近の自分の寫眞を入れて送りますと仲々返事がや

四

その後主人の身も落ついて参りましたが、それでも熱は今だに卅八度位で相當苦しうでございませう。食事は今も朝夕お粥を頂きますが晝は食慾が起らず困ります。

先生、でも主人は以前の主人と大變な變りやうで御座います。とても／＼落付いたものです。何かを悟りつかんで呉れたのかも知れません。苦しの中にもあゝした氣持で居られる主人はせめてもの幸福であらうと思ひます。

何れは主人の身も駄目だといふ事も覺悟はして居ります。又主人とても駄目だと申して居ります。でも先生、なるものなれば今一度歩ける迄にしてやり度いと思はずには居られません。どんなに喜ぶ事でございませう。三月廿三日 K子

五

先生ほんとうによく來て下さいました。こんな遠い所へよく來て下さいました。數々の失禮はどうか御寛容下さる様吳々もお詫び申し上げます。

病床について以來の何よりの喜びでした。一所懸命こらへながらも溢れる涙に醜い顔がゆがむの

でした。廣い世の中にたつた一人でいゝ。このつまらぬ私の爲めに祈りそして又いとほしみ泣いて下さる先生のある事は私にとつてほんとうにたとへ様も無い喜びであり、實に私の心を豊にして呉れるのです。

何も語らずとも先生が側に居て下さる間は満たされた氣持でゐたのですが、先生がお歸りになつてからは只譯も無く泣けて／＼今も尙涙がしきりと頬を傳ふのです。然しその涙は柔かに私の心を潤はしてくれます。又お會ひしたい。それ迄私は如何に苦しくとも力強く耐へて行きます。どうか奥様によろしくお禮申上げて下さい。

三月廿八日

T・K

先生。有難う存じました。

先生もさぞお疲れのことで御座いませう。今朝ほども主人と一緒に、頂きました御念珠を手にい／＼語り、たゞ涙するのみで御座いました。

先生。私達は薄縁だつたでせうか。決して決してさうではない氣が致します。何とかしてもう一度私の眞心でせめて床でなりとも起きられる迄に致します。

つて來ず、突然昨日部隊長から父の死を聞かされたのです、二月十七日に父は死んだのでした。

戦線の月光のあかりで認めた故郷への便りの數々は、母ひとり寂しく留守する吾が家へ着いて残された母の涙を押し止めた、父宛に來る吾が子の便り、家を捨てゝ君に仕へる吾が子の心を曇らせる父親の死といふ報せはどうしても非常時の母としては傳へられぬ、父の死をしらせて若し傷心の餘り御奉公にさしつかへたなら……母の心配は實にこれでした。

そして父宛に來る私の手紙を見ては涙の内に父は健在だしつかり軍務に精進せよと書いて寄こしました、その手紙を私は天津の地で手にしてひたすらに故郷の父母の身の幸福

先生。御迷惑で御座いませうが何とぞ又お便り下さいませ。何よりの慰めで御座います。K子

六

前略。丁度一ヶ月を経過しましたが一向快い方に向かず、朝から八度以上の熱が出ます。

ともすれば肉體の病苦に打ち負されそうです。私のため先生の心を大變暗くしてゐる様で恐縮に存じます。私も今度は何となしに淋しい／＼氣持がしてなりません。

散らば今ぞ草葉のかけも花吹雪

四月五日

T・K代筆

今朝ほどは御心盡しの品々嬉しく頂きました。何を待つて行つても首をふる主人も枇杷や羊羹を大變喜んでいただきました。そして泣いて／＼泣きました。

觀念して苦しさを忍んでゐる主人を見るのはつらいことです。主人は頂きました御念珠を毎日毎日胸にあて、たへずお念佛を稱へて居ます。どうぞ御手紙を下さいませ。K子

七

去る廿五日は丁度去年房州からこちらへ歸つた

日で御座いました。先生や奥様やお嬢さん達にお見送り頂きました。雨の中を恐る／＼淋しい氣持で歸りました。

もう一年になります。この廿日より又々主人略血が起りまして今に止りません。主人もやがては逝かねばならぬ身と觀念して居るのですが別に騒ぎませんが見る目も苦しそうです。午後三時頃からは全く喘いでゐるといふより言葉がありません。見る毎に涙がにじみます。四月廿八日 K子

八

前略。先生。何から申上げたらいゝのでせうかもう私は胸が一杯になります。主人の方を見ましても只淋しい御燈明が一つ光つてゐるだけです。早速先生からの御便りをお供へしてねんごろに報告申しました。

先生。主人はとう／＼逝つて了ひました。あれ程やさしい美しい愛を持つて居た主人でしたのに。先生、けれどもお喜び下さいまし。主人は、喜んで／＼すべてに感謝しつゝ御念佛を唱へつゝ靜かに／＼参りました。

思へば廿日の夕方でした。お夕飯の時何だか胸

を祈つてゐたのですがこの時は、已に父の靈魂は永遠にこの地上から消え去つてゐたのです。私は父は健在だとばかり信じてゐました。

傷心のあまり吾が子の御奉公にさしつかへたらと母は女親の小さな胸に男々しくもこれだけの自製の心を宿して、父の健在を私に偽報してゐたのです。

所が突然、吾が子から母宛の手紙と寫眞が来たものです。ら、私が父の死を人づてに聞いたのだと思ひ、部長長の奥様にお話して奥様から部長長に通知があり、昨日始めて部長長から父の死を聞かされ今日の御回向の時間を頂いて來たといふ譯です。」

しんみりとした話、他人事とは思はれない。

「父が冥目してから六十五日

が／＼と申すので見ますと、今迄何とも無かつた胃が急にぼん／＼にはれて居ます。早速注射して頂きましたか間も無く何もかも出してしまひました。主人も自分では何も彼も分つて居たものと見へます。私を側より離さず。二十二日午後一時頃でした。ぼつ／＼私に言ひきかせ、すべての御禮を言つて「よく今までつくして呉れた。本當の事を云へば今少し元氣であつた。何も残さず逝かねばならぬ事が恥しい」といかにも残念そうでした。両親は勿論のこと里の両親も来てくれましたが、たゞ苦しい中から笑つて御禮を言ひ、お念佛ばかり唱へて居りました。三日間は何も食べられず二十二日の夕七時半に亡くなりました。亡くなる前に先生に、千葉の先生に「と云つて何か私の顔から讀み取らうとして居ました。屹度もう一度お逢ひしてお禮が申したかつた事と思ひます。先生から頂きました御念珠を手に、そして昨年送つて頂きました善光寺の御札、そしてあの観音様の御寫眞を持つて行きました。主人があゝした静かな／＼何思ふ事もなき顔で死んで逝く事が出来ましたのも先生が今日までいろ／＼とお導き下さ

いましたおかげと存じます。思へば全く惜しい事をしました。今日まで一日として安心な健康生活の出来なかつた私達夫婦の因縁の薄かりし事が残念です。主人も嗚ぞ残念な淋しい事だつたらうと思ひます。

いろ／＼お傳へしたい事やもつと御話申し上げたい事が有るのですが、どんなに書き度くても表はせません。心は亂れ全くおはづかしい事ですがお赦し下さいませ。どうか今日まで先生と共に御心配下さいました奥様にもよろしくお傳へ下さいますやうお願い申します。

七月二日 K 子

附記

この手紙の主人公たるK氏は官立の

最高學府を出られた若き理學士であつた。ふとした縁で旅行中の氏を診察した事から親しい交際をする事になつた。文中に見へる様に病中を歸郷されてから一年餘にして遂に亡くなられた。學生時代は禪などの聖道門に心を寄せられてゐたやうであつたが後、他力の信仰に安心せられ固く淨土の再會を約して逝かれた。紙面の都合上非常に割愛せねばならなかつた事は残念である。私信を公にして恐縮ですが之が多少なりとも淨土信仰の縁にもなれば氏も必ず喜ばれることであらう。南無阿彌陀佛。

目、故郷を離る事遠きこの天津で父の信仰する淨土宗の知恩院別院で御回向して頂いて地下の父もさぞ喜んでゐる事でせう、南無阿彌陀佛の御念佛が本當に身にしみて有難く感じられました。母はひとり東京で私のかへりを待つてゐます、私は父の死に勵まされこれからはより一層軍務に精進する覺悟です。語り終つた小杉君の日にやけた横顔は心なしか、青ざめてゐました。

「又休暇に伺ひます」といふ小杉君に淨土を渡しグツとこみあげてくる熱いものを押へながら「お待ちしてゐますどうかお身體をお大事に、軍務に御奮勵下さい……サヨナラ」送り出してこんな兵士が多數あるのだ、この様な健氣な母親がまだ無数にある、だから日本は強いのだ私達が安らかに眠らせて頂けるのだと思つた。

俳壇

大田 耳動子



深川區 佐藤 瓊石

床の間に秋の景色の鳥瓜

評——古木にでも結まつてゐるやうな鳥瓜が床の間に活けられてゐるのかも知れない。それが如何にも自然にあるがまゝのやうなので、『秋の景色の』と詠つたのであらう。中七字の見方が平凡でない。普通ならば『床の間に活けられてあり鳥瓜』といふところであつて是では單なる説明的、報告的に過ぎない。此の句には何の關係も無いやうだが、私の句を二つ思ひ出した。『山深き景となりけり藤の花』藤の花の咲いてゐるのを見つけて、山深く来たな、といふ感を抱いたのである。『火鉢立て、景色とふ火鉢かな』火鉢の縁に火鉢を二本きちんと立て、如何にも火鉢本來の姿であるかと見たのである。何事にも、そうであらうが、人の氣のつかない所を見つける、つまり發見するところが無ければならない。

秋田縣 鎌田 英男

コスモスや門の名札は伊藤寓

評——コスモスが美事に咲いてゐる。碧の空は満るばかりの秋日和だ。あまりの清々しき、親しきに、遂に家の名札を見上げた伊藤寓としてあつたといふのである。下五字が活躍してたり、此處に發見がある。此の次に誰か『伊藤寓』のかはりに『鎌田寓』とでもして他に用いたとすれば是はつまらぬ句になつて了ふ。何となれば最早發見ではなく、模倣だからである。

蟬の聲流るゝ夏の座敷かな

評——風通しの宜しい夏座敷に居て、じつと蟬の聲を聞いてゐると、それが座敷を通じて流れてゐるやうだと感じたのである。『流るゝ』と見たところが發見である。扱て前の句のコスモスでも深山の『コスモス』を表現してゐる様に、此の句の『蟬の聲』でも『蟬時雨』を充分に思はせてゐる。故人の句では『菜の花や月は東に日は西に 蕪村』の菜の花の如く。

大津別府 中茶

草花に淡き月こそかなしけれ

東京 木村 錦夫

秋晴に聲音ころがし鳶の笛

和歌山 奥村 映水

秋風の堤防白く蟹遊ぶ

東京 三野 輪江雪

新米の餅を搗く日に歸りけり

福島 齋藤 華舟

これはく葱にとまりし赤蜻蛉

大阪 辻 赤蜻蛉

夫征きてちゝろの秋となりけり

東京 原田 ふで女

白露の大空踏みて木の子道

栃木 黒衣 乙女

父おはす秋の夢こそ哀しけれ

中田 関 瀧 龜 齡

芒原大きく夕日沈みけり

下關 中尾 頑 龍

山の蚊の大き羽音に目覺め居き

京都 永田 七 郎

この橋にこの柳あり月今宵

小樽 中村 茂 舞

風爐の名残母子してくむ茶の湯哉

名古屋 海 廣 芳 月

栗賣りや七里渡の船の中

丹波 久野 塔 月

ダットサン難踏くぐり天の川

丹波 中村 百合 女

雷のあれまはりたる月に佇つ

滋賀 重野 ふみ 子

秋の夜は香たく煙靜かにも

石川 西村 けん 治 郎

右左通草とる山樂しけれ

岡山 中村 護 孝

此の寺の水槽深し月の秋

青森 泉 新 水

宵ふけし砧の村の宿りかな

朝鮮 椎 葉 球 磨 蘇

迎へ火も母ゆきしより寂しけれ

大阪 橋 本 花 汀

蟲の音にしみるゝと聞く法話かな

栃木 大 輪 清

木魚からたちいづる蚊も秋の朝

山口 花 岡 見 智

銀紙を拾ひに入りぬ簞草

富山 藤田 四三 句

電線も秋酣の蜻蛉かな

新潟 藍 木 香 雄

遙々と見わたす稻の波の秋

朝鮮 鹽江 八年 坊

名月の澄みていよくのぼりたる

熊本 牛 島 琳 平

秋の蝶風に乾きて石白し

大阪 吉 廣 夏 生

新涼の夕餉にのぼる鰯かな

石川 西村 けん 治 郎

すがれつゝ朝顔の花咲きつげる

東京 宮 本 倚 子

門燈の守宮のじつと見おろせる

東京 久 保 義 喜

アルバムの埃拂ふも夜長かな

横濱 塚 本 秋 月

降り暮れて秋の深きを知る夜かな

下關 關 野 公 孫

新薬をはみて波止場の軍馬かな

奈良 良 山 下 龍 章

秋の空聖地に晴れて奉仕隊

米子 堀 井 増

月の道小犬つるゝは女かな

子 賀 別 府 中 茶

柿朱し童の瞳かゞやかに

弘前 泉 新 水

晩鐘の一つ一つは秋の風

米子 宮 本 倚 子

青柿のうつれる井戸をくみしなり

佐賀 森 田 昇 雄

へんぽんと秋の空行く出征旗

佐賀 森 田 昇 雄

投稿規定

官制はがきに一回二句以内
とし「浄土」編輯部併増係
あて送ること

★戦地の秋★

現地にて 一瀬 秀雄

これまで次々に各地に轉じ、随分と色々なこともあり、多少苦勞もしました。ところで、昨今は又長江を何日間か航行し、○にゐますが、これまでとは打つて變つて山又山で坂道ばかりです。一寸内地で見るやうな感じのする所があります。

小生等相變らず元氣一杯で忙がしいことも呑氣なことも、まあその時々で愉快にやつてゐます。今までもそうであつたのですが、當所でも何もなく、人はゐません。よ



隨筆 上越雜記

村田嘉久子

大好きな秋が來た。

秋も中頃になつて、茅葺屋根の田舎家の前にタツタ一本植つて居る柿の木に一杯柿の實が赤く熟してゐるのなど見ることがあると、私は妙に心をひかれて堪らなく嬉しい氣持になつてしまふ。さうした風情を見ると、芝居で演る「隣り柿の木は十六七かと思ふて覗きや色づいたえ……」とよく田舎家の幕開などに下座で使ふ唄を思ひ出す。どういふものか私は田舎家と柿の木が大好きだ。

もう一ツ私の好きなものは水車だ。水車のある所へは大がいの道も平氣で歩いて見に行く。見に行つた時、どうかして水車が止つて休んでゐたりすると大へんに失望する。

此夏、かねてから機會があつたら行つて見

たいと思つてゐた上越の温泉めぐりをやつた時、湯宿、湯島、法師、猿ヶ京と廻るうち、猿ヶ京の笹の湯に滞在して居る間に、山の方の百姓家で澤山の柿の木と水車を三つも見る事が出來たのには、思ひがけなかつただけに本當に嬉しかつた。

靜かな話聲一つ聞こへない其百姓家で、只水車の水の音と小屋の中のコットン／＼お米をつく音だけを聞いてゐると、すべてを忘れるやうな氣がする。

さうした時いつも、私は無意識の内に「南無阿彌陀佛」と口の中で唱へるくせがある。何日何處でも一寸したショックを受けた時、かならず出るくせだ、勿論宜い氣持の時でも不愉快な時でも……嫌な氣分の時には一倍はげしく唱へる事がある。小さい時からよくお念佛を聞かされて育つた故かも知れない。

私は非常に靜かな事の好きな性質であるが、はげしい仕事にたずさわつてゐる故か、一面非常に性急な處もあるので、よく温泉へなど浸つてゐても、よほど空想にでもふけつ

く牛がぶら／＼歩いて來ますのでこれを捕へるか、又は射つて食べます。豚は實にまづい面付をして感にたえたる泣聲を出してわめきます。それから芋がよくあります。里芋です。先日ナマズを捕へました。仲々美味です。珍味は以上の通りであとは送つていたゞいた雜詰です。

朝起きると間もなく晝食で、これが済むと直ぐ夕食です。夜になると電氣などあるわけのものでありませんので、早く寝ます。水は山地でクリークもないので、池の水です。

私共の小隊には輕機が二銃ありますので、心強いものです。彈が景氣よく飛び出して、山間にこだまします。

この數日の間に大變涼しくなりました。従つて水浴も出來なくなりました。稻は刈られぬまゝに倒れてゐます。しかし馬がやせてゐますので、馬糞には最適です。毎日々々馬の背を撫でゝは、肥らぬかなあ、と嘆じてゐます。(寫眞は筆者)

て居る時でないときちつともゆつくり入つてゐる事が出來ない性分だが、此頃はずつかり宜い事を考へつゝいたのだ。それは温泉へじつと浸つてゐる間「なむあみだぶつを」何遍も何遍も唱へる事である。さうするとちつとも退屈しないし、時間の經つのも忘れがちだ。無

我の境に入るとでも言ふのだらうか。笹の湯の宿は溪谷の一軒家で、老人など非常に急な坂道とてなか／＼不便で一寸は行かれないが、其別棟に元湯があつてそれは／＼ぬるい温泉が出てゐる。昔は名湯としてなかなか繁昌したのださうだが、今は新しく建られた温度の高い風呂場の方へ皆入つてしまふので、其方の風呂場はめつたに人が入りに行かない。

始めて入つた時にはなんとなく無氣味な氣持がする程であつた。周圍が薄暗くて、晝間だのに一人人居ず、すいけた風呂場の天井やこわれかゝつた板の間など、どうにも氣味が悪くて底の知れないやうな深い湯槽の中へ入りはしたものの、その冷たさに暫くは出る事

出來ず、どうにも困つてしまつたが、約一時間位ひじつとしやがんだまゝ(箱が小さいので足も満足に延す事は出來ない)、少しは體が温まつて出られるやうになるまで、何百遍何千遍かのお念佛を例によつて唱へつゞけてゐた。

その時フといつか母とお念佛について議論した事を思ひ出して一人で可笑しくなつた。その議論といふのは、母は「なむあみだぶく／＼／＼」と唱へれば宜いと言ふし、私は「なむあみだぶつ」とつまではつきり言はなければ本當の「南無阿彌陀佛」と唱へてゐるのではないと言ふのである。どつちもなか／＼譲らなくて「どつちでも同じぢやないか……」と皆に笑はれた事があつた。

それを其時ふつと思出したのでいろ／＼の言ひ方で「なむあみだぶつ」を唱へて見たがどうも矢張り母の言ふやうになむあみだぶの方が口ずさみも宜いし、澤山唱へる事が出來るので、矢張り老人の言ふ事は素直に聞くものだと思ひ思つたのであつた。

大食ひじり

佐賀一途

平安朝の歴史を考へると、誰もが京都の歴史を胸に泛べることでせう。公事と供養に日を追ふ優雅な公卿の生活——ひとつところに踞踏して、都以外の世界はこの世のものとも思はない、まことに「平安朝は實務の時にあらずして風流の時なりき。」と云はれるやうに、美しい胡蝶の夢を後世にまで漂はしてゐます。そのみやびやかな繪姿をつくりだすために、勿論京都といふ土地の地形の美が大きな力を添へてゐます。山紫水明——その語はむかしから京都を語る者達の間に繰返されてゐます。こゝでまた京都を取圍むかずかずの名所繪を口説く必要は感じませんが、藤岡

博士の文から「三面を山にして土地温潤、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずして明かなるべし。」だけを引いて置きます。

その頃、京の都に近い伏見のあたりに、さゝやかな僧庵を結んで静かな飄經に日を消してゐた清徳聖といふ聖がをりました。格別世に知られた高僧といふわけでもなく、ただまつかうひたむきに、一人でこつこつと精進をつづけてゐたのでした。ところが、この聖が四十になつたとき、お母さんの死に會ひました。聖は世捨人にはちがひありませんが、大そう歎き悲しみました。さうして泣く泣くお

母さんの亡骸を僧庵に引取つて、懇に回向供養をいたしました。が、幼いときからの母の恩を思ふと、自分の孝養の至らなかつたことのみが悔いられ、別離の悲しみが滾々として盡きないので、たうとうお母さんの棺を背負ひ、都の西に當る愛宕の山に分け入つて行きました。そして山麓も通らぬやうなひつそりした森蔭を選んで棺をおろすと、四隅に大石で支へを作つて安泰にし、千手陀羅尼を片時もやすむことなく、飲まず、食はず、寝ず、——瞢の絶えることなく棺をめくりながら誦しつづけました。

……ちやうど三年目の春です。いまは身に

つけた法衣も弊れ果て、頭髮蓬々として見るかげのない枯枝のやうになつた肉體を鞭打ちながら、たゞ不退の精進を重ねてゐる聖の眼前に、突然母の姿が立ちあらはれたのでした。思はずはつと聖がその場にひれ伏しますと、聖の肩にやさしい手を延べた母は靜かにかう告げるのでした。

「あなたの誦した陀羅尼の功德で、わたしはいま佛に成ることが出来ました。お禮を申し上げます。」

その聲のなつかしいあまり、聖が取纏らんばかりの心を抑へて眼を上げたとき——いま

公 信 仰 坐 談 會 案 内 (來 聴 歡 迎)

來ル

日時

十月三十日(日曜日)×(第五回)夜六時半
十一月六日(土曜日)×(第六回)夜
十一月十三日(日曜日)×(第七回)夜
十一月二十日(日曜日)×(第八回)夜

会場

本郷區東片町七八、美容大藥院 橋本榮榮方
電話小石川四九七六番
(電車白山坂上下車スグソバ)

講師 中村辨康先生

講話のあと坐談 九時頃終了

の今さきまでのお母さんの姿はなくて、そこには眼も眩む後光に圍繞された佛の姿がありありと拜めました。が、次の瞬間、光が消えて、佛の姿もありません。

聖は歡喜踊躍しました。そして森蔭のその場所にお母さんの棺を埋め、卒塔婆を建立し、心からの禮拜をすまして別れを告げました。

聖は三年ぶりに山を下りて行きました。ところが、「琴の音涼しい」清瀧川の流れを見るとき急に喉の渴きを覺えましたので、その岩かげに跼んで兩手で水を掬ひ、一口飲まうとしましたが、きつと三年間の渴きが一ぺんに喉を破つたのでせう、そんなことでは満足せず、いきなり身を川中に投げこんで、あぶあぶやりながら川水をのみつづけました。それから西京までやつて來ますと、「梅の花散りて鶯老を啼けば、柳の緑、桃の紅、花の音信あわたししい季節のうつりも繪空言にうち捨てた聖の眼には、そこら一面にひろがる葱畑にどうにも納まりのつかなかった食欲

を覺えるのでした。それで聖は、葱を手折つては口に入れ、口に入れては次のを手折つて歩いて行きました。すると先方から歩いて來たお百姓が聖の仕草を眼にして、あさましいと云つた顔をしました。が、相手が見すばらしい坊さんだけに氣の毒に思ひ、

「そんなにひもじいのでございましたら、どうぞこちらのを召して下され。」と云つて、自分の所有の葱畑へ聖を連れて行きました。

「長の年月、物も食はず困り果ててをりました、ああ忝けない。」
聖は禮を云ふのももどかしさうに、すぐさま葱畑の中にとびこむと、あざり歩きで眼を白黒させながら食欲を充たしました。驚いたことには、三町ほどの畑の葱を、僅かの間で聖が食べ盡してしまつたのでした。お百姓は親切と好奇の心も失せて、だんだん怖ろしくなつて來ました。そしてこそそそ逃げるやうにして家に馳せ戻ると、早速今見て來た聖の有様を近所中に云ひふりました。



まはる

聖は山から出たばかりの身なりをかへず、伏見の僧庵のことも念頭にないもののやうに、京の街を毎日うろうろ歩きまはつてをりました。聖の心はものを食べることでいづばいでした。傍目には、どうしてもさうとより考へられないのでありました。物持ち先祖の供養といふので、白米一石を聖にすゝめ、聖が一度にその飯をたべてしまふのを眺め、

「せつかく極楽においで先祖様も、これでは地獄の餓鬼に生れかはる。」

と云つて、聖に向つて唾を吐いたりしました。それでも物めづらしさは都のならひで、聖の大食ひは到るところで評判になりました。聖は悪口にもかまはず、白拍子に對するやうな人氣をも意に介せず、相かはらず供養に預かれないだらうかと云つた顔で、商ひ人の顔いろを伺つたり、牛車のあとを追つたりしてゐました。

さてその聖の噂さが、四條に住むさる大臣の耳に入りました。その大臣は佛教の歸依篤く、經文を誦すことを日課の主たるものにしてゐるほどの方でしたから、「結縁のために」と申して、聖を呼び迎へることにいたしました。

聖はよろこんで大臣の御殿に向いてまゐりました。大臣は聖を迎へるため中門の廊まで出ました。と、いま相かはらずのぼそぼそした歩みを運んで来るあの聖の姿が、何と尊い菩薩の姿となつて大臣の眼にうつつて来る

ではありませんか。のみか聖の後からは――

――大臣ははつきり認めました――餓鬼、畜生、虎、狼、犬、鳥、萬づの鳥獸が千萬と群をなして隨行して来るではありませんか。

――米十石の飯が、新しい桶、櫃に入れられて聖に供養されました。それはみんな、聖の隨行のものどもが食べ盡したのです。しかし、それは大臣以外の誰にも見えない、大臣だけが知り得たありがたさでした。

禮をのべて立ち去つて行く聖の後ろ姿を拜

みながら、「きつと佛の變じて歩き給ふのであらう。」と思ひ、大臣は一層信仰を増長するよすがといたしました。

ところで、御殿を出た聖は、さも満足したやうな顔つきで四條の北の小路を通つて行きましたが、その歩み去つたあとの地面には、墨のやうに黒い土くれがいつばいに散らばり、その臭さといつたらありませんでした。きつとあの隨行の奴ばらのした業にちがひありません。――その小路はしぜん「糞の小路」

と呼ばれるやうになりましたが、これも三位

のさる公卿が「その四條の南は何といふ？」

とお側の者にたづねたところ、「綾の小路」

と申しましたので、「ではこれからは、北は

錦の小路と名づけよう。」と云はれました。

こんなところにも、平安の都がうかがはれ

ないであらうか。

大食ひの、清徳聖は、その後の話を傳へて

ゐない。(をはり)

服部 亮 英 畫

寸評 街の標語

街で愛國婦人會の標語の立看板を見かけた。「兵隊さんは命がけ、私たちはた

すきがけ」と云ふのである。

命がけとたすきがけで語呂を合はしたつもりだらうが、同じがけでも命がけとたすきがけとでは内容の重さに雲泥の相違があるから寧ろこの標語は甚だ失禮な申分

だが滑稽に響くのである。命がけと云ふからには、それに對してこつちも命がけで働く」と云ふ位ひの言葉が對置されなければ、たすきがけ位ではあんまり輕すぎる。

先日某紙に或る農夫の妻が戦地にゐる夫に自分の畑の稲の穂を送つたと云ふ感激すべき記事がのつてゐたが、これらの涙ぐましい銃後の努力はたすきがけどころの騒ぎではないのである。勿論たすきがけで働く、一所懸命に働かうと云ふ意味で

あることは間違ひないが、普段から男子同様の服裝で身を粉にして働いてゐる勞働婦人、野良で、家庭で苦力の様に立働いてゐる農村婦人等は勿論、都市の一般小市民婦人達でも、たすきがけ位の働きはしてゐるのであるから、それらの人達にもこの標語は遺憾乍ら感銘がうすいと云はねばなるまい。

近頃標語が流行るが輕薄に渡らぬ様注意してほしいものである。

支那若日談

葉 信

支那へ出かけて行つて、或は驚いたり、或は困つたりするとはその人によつて多少は相違するだらうが、何と言つても第一に言葉の變化の激しいことだ。二三日前上海で用ひてゐた支那語が北京に來るとどうもよく通じないと言つた風である。それから、惡疫、惡水、黃塵、匪賊等と其他數へ上げたらいくらでもあるだらう。だがそう言ふ分りきつた方面でなく、ちよつとしたつまらない處に不可解な支那の面相が現れてゐるのに氣がつくだらう。試みにぶ

らつと街を歩きながら眼を屋根や軒下に向けて見給へ、其處には何と言ふ不可思議な、分らないことが立並んでゐるかを發見するだらう。それは金色やその他色探りどりに書かれた看板、即ち招牌である。

「白髮三千丈」など、誰でも知つてゐるやうに、支那は文字の國とは言ひながら、文字に至つては全くあつと驚いたり感心したりすることばかりだ。文字に關する限り文章に關する限り、宣傳に關する限り、所詮日本は支那の敵でないやうである。支那事變の勃發した當時なども逸早くやつてのけたの

は、文字、文章、宣傳の國のお得意の惡辣な逆宣傳である。これには少からず我國も惱まされたのは事實である。

日本と支那は同文同種の國とは言へ、『非常口』の代りに『大平門』と書き、『小便無用』の代りに『君子自重』と書く支那だからこそ巧みな宣傳の國となるのだらう。では一體どんな招牌があるのか、街頭を軒なみかぞへて見やう。

天香玉露

とあるから、さては上等なお茶や線香でも賣つてゐるなど、飛込んだら、お茶や線香などとは凡そ縁の遠いバイー、酒店なのである。即ち「天香玉露」とは天から降つた貴重な香り酒だと言ふのだから、一つばい呑ふと思つても、中々面倒で骨が折れる。其他、「四時花露」「飛騰

醉月」「鵝黃滌鼻」「相如風景」「女貞」等々みな酒屋である。また「杏花深處」など洒落たのがあるが、これは杜牧の有名な詩の一句「借問酒家何處有、在りや牧、童遙に指す杏花村」から採つたものだと言ふから、益々難解である。何だか看板を見ただけで陶然となる好文字だ。

「猪行」と書いてゐるのは豚商の招牌だ。豚は支那人の最も珍重するものであるが、下級の市街や田舎などでは多く養飼してゐる。猪行は生豚を商ふもので豚小屋をしつらへてゐる。では生きた方でなく「肉屋は」何と言ふのだらうか。

金鳳彩蛋と大變むづかしいのが肉商で、金鳳は金華火腿の略、金華は浙江省金華府のこと。この金華は火腿（豚の股の

肉を炙つて鹽漬にしたもの)の本場であるから言つたのである。彩蛋は又は皮蛋とも言つて、家鴨の卵の上等なものを選んで、石灰、粘土、食鹽それから灰との混合物に粗殻を調和して練り交ぜその中に卵を入れて、空氣に觸れないやうにして置くと、その蛋黃は自然と彩綠色に變つて長く保存するに従つて色黒くなり風味佳良だと言ふ。支那人の嗜好品として最も魅力のある燒豚と家鴨の卵とを「金鳳彩蛋」の四文字で簡單鮮明に表したところにこの招牌の生命がある。

砂糖漬の棗であるのに驚く位が落ちである。砂糖屋の隣りに「名園鮮菓」と書いてあるから、菓子屋かと思ふと、菓物の店の招牌である。鮮菓とは産地の菓物の意で。支那の菓物は南鮮、北鮮に分れてゐる。だから水菓子屋を「鮮菓店」など言つてゐる。

油」とあるから、補益とはどんな意かと考へると、身體を補養し健康上益あることで、醬油屋である。實利主義な顧客の心を巧に捕へたらしい。

二

食べる方ばかり覗いたから、その他の商店へ眼を向けてみる。「あッ」靴紐が切れたなどと周章で「皮絲」とある招牌く店に入らうものなら、「ハイ、何の刻で」などと刻煙草を出されるからと言つて、ナンセンスだと笑へない。また「菸行」も煙草屋だ。「菸」は煙草で、水菸と旱菸とに別れ、水菸は水煙袋(水を通して吸ふ煙管)用の煙草旱菸は錠子(刻煙草の塊り)、葉子(葉のまゝのもの)、潮煙(廣東省潮州産)の三種がある。また「呂宋雪茄」ともあるのは、呂宋はもと煙草の名産地だからで、雪茄はシガーである。

『皮絲』が靴屋でないなら一體靴屋はどこだと探してみると、何と「衛生暖鞋」とまるで東京の新宿や浅草邊りの裏街によく見受けられるサイン・ボードみたいだから笑はせる。暖鞋とは防寒用靴の意で、衛生とは數年來支那の流行語なのだ、衛生の言葉を喜ぶ國民が甚だ不衛生であつたりする邊りは、眞に支那の國民性の一面をのぞかせてゐる。その他「履雲歩月」「履步登雲」などと洒落たり、「把橋三進」などと黃石公に張良が靴を捧げた古事をもつて來るなど支那、支那である。

「花來洋綢」が呉服屋なのだから、日本の婦人などが支那に出かけて、反物などを求めるのは

容易でない。花來とは模様入り又は無地の織物で、綢とは綴子である。また「正頭抄莊」アバートの名ではない、實は反物卸商であり、「成衣舖」は仕立屋それも既成品屋で、注文する方は「定做新衣」と小さきみに説明してゐる。

化粧品屋の「艶客官粉」や「妓艶咽脂」などは一寸頭を回らせば解るけれど、「格致切深」に至つては少々解りにくい。支那の昔聖人が、格物致至などむづかしい言葉を曰はせられたが、さては儒教學問所などと誤認してはいけない。これは藥屋さんだからである。藥屋にも「良方濟世」「萬象回春」「限日除根」など功顯を言つたのも多い。だが「清陳公膏」など書いてあるから定めし家傳の名膏でも賣るのかと入つて見

ると何と「阿片」商である。またこの恐るべき中毒患者を作る阿片屋が「清水宿膏」なのだからお話にならない。

我國では古く「七つ屋」など唄ひ、現代で「一六銀行」などで通る簡易銀行の質屋は、支那では「當舖典質」としち面倒臭い。質屋は、當舖、質舖押舖に區別されて當舖だけが官の特許のもので他はもぐりで利廻りも高いことになる。

質屋の附近には宿屋があるものである。これは日本の方かも知れないが、支那では「仕官行臺」「仕商安寓」と言ふ。その他一通りの招牌をかけ足でのぞいてみると、「八音鐘表」が時計屋「三教眞香」は線香屋で三教とは佛、道、回、でこの三教に用ひるのだと言ふ。また「妙術回天」は氣合術師でも

何でもなく眞の醫者であつたり、「品重洛陽」などは洛陽古質からの出土品名みたいなのが紙屋なのだ。即ち洛陽の紙價の古事をとつたもの。また「鳳舞龍翔」も紙屋である。

また一寸食ひ氣の方にもどつて、「八仙對桃」が菓子屋で、これは西王母の故事から出たと言ふが、その他同じく「韻味超群」「五式名點」「回聘喜糕」など甘黨の喜びさうな形容である。

三

こんどは滿洲の方へ行つてみると、奉天の奉天銀座、四平街通りの大デパートの前には「吉順絲房」の大旗が吊つてある。これは呉服商の商標だと言ふ、滿洲では酒屋のことを「燒鍋」と言つて店先には錫製の壺

みたいなものがぶら／＼してゐる。この壺に「山東老酒」など書かれてゐるのも風情がある。新酒のはしりが出ると、竿の先に竹の葉をつけて、中天に掲げる。これはあちらの七夕ではない。これは

孟中浮竹葉の古詩から來てゐるのだと言ふが、洒落もこの邊まで來ると一寸古事類苑を見たのでは分りさうにない。

以上は支那の街頭看板風景であるが、これはほんの一部分で未だ／＼珍奇、奇想天外なものが多いと思ふ。その文字にしてもこつたものばかりで雅趣餘韻があると言へば言へるが、惡趣味でもある、こんな風景の中に考現學するのも、支那の國民性その他を知る上に興味ある事實となつて來るであらう。

信 仰 相 談

中村辨康師擔當……

〔本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可〕

浄土教は果して易行道か

〔問〕

私は浄土宗の一信者です。此頃私の信仰はぐらつき出しました。其理由は、浄土宗は易行道と云はれるが、果して易行道か行より云へば易行かも知れないが、其所説は實に難信の教であると思ひます。難信の教なるが故に行も亦た難行です。信じ易くして信じ難く、行ひ易くして行ひ難き教が浄土教（法然）の所説と思ひますが、此の私の信仰上のぐらつきを御教へ下さい。（滋賀・大原・三ヶ月）

〔答〕

御尤もな御尋ねと存じます。然し佛教の中で、聖道門と云はれるものに、

小乗教に於ては三十七道品と云ふ修行法があり、大乘教に於ては六波羅密とか或は止觀とか云ふやうな修道法があつて、古來の聖者達が精魂を勞らせて修養せられました。中々完成の域に達する事が出来ませんでしたので、止觀の大成者である天台大師を始め、天台眞言三論華嚴法相禪等の各宗の碩學達も、熱心な念佛者になつたのでした。だから其聖道門の修行法に對して、念佛が易行道であると云はれた譯です。

「佛法に無量の門あり、世間の道に難あり易あり、陸道の歩行は苦しく、水道の乗船は樂しきが如し。菩薩の道も亦た是の如く、或は勤行精進するあり、或は信を以て易行にして不退轉地に到るあり」と云はれたことが初まりで、それから曇鸞大師とか道綽禪師とか、或は我國に於ては法然上人親鸞上人等が云はれたものです。だから他の行との比較上の言葉であります。譬に引いてあるやうに徒歩旅行は困難であるが船の旅行の樂であることは云ふまでもないでせう。然るにいま貴君の出された問題は此の比較ではなく「船に乗るのが困難ではないか」と云ふのです。忌憚なく申上げますればそれはまだ餘裕がありになるからではないかと思ひます。船賃はいらぬのですから乗りさへすればそ

れでよいのですが、心にゆとりがあつてまだ差迫つて居られないものですから「乗らふか乗るまいか」と迷つて居られるのでせう。まだ外に樂な方法がありさうなものだと御考へになつて居られるからではないでせうか。誠に失禮なことを申上げて相すみませんが、前途に茫漠たる大海があるとして何うしても彼岸に行かねばならぬとする時、陸路では廻り廻つて山嶽重疊たる坂路をよち登らなくてはならぬが、それは人跡が絶えて居て到底及びもつかないとしたら、茲にどうしても船に乗るより外に手段がないと思ひます。しかも無賃の船です。船にのるのが何うして困難なのでせうか。溺れるものは薬をもつかむとさへ云ふではありませんか。畢竟まだ溺れて居ないと思つて居られるからではないで

信 仰 相 談

せうか。
溺れて居り乍ら、溺れて居る
自覺がない。それが謂ゆる私
達凡夫の常であつて、それは獨
り貴君ばかりではありません。
私なども同じやうに其自覺が
深刻でないのです。之が即ち
「信の難信」と云はれる點であ
ります。「外には救はれる道が
ない」と云ふ實情さへ判つた
ら、如來の願船に乗らざるを
得なくなる筈ですのに、まだ外
に道があるらしく思つて躊躇し
て居るからいけないのです。
親鸞上人は「地獄一定」と
自覺されたからこそ「法然上人
にすかさされまいらせ」て念佛門
に歸られたのであり、また善
薩の典型である觀音菩薩は寶
冠に阿彌陀佛を頂いて居られ
るのであります。即ち阿彌陀
佛と云ふ太陽の光を受けて居ら
れるからこそ、觀音菩薩と云

ふ月に光が輝いて居る譯でせ
う。信じ難いのではなく信ぜざ
るを得なくなるまでの自覺がな
いからです。行ひ難いのではな

日常勤行法の順序など

問

我々在家の者が朝夕二
回 各約三四十分間
位勤行致しますが、それは如
何なる經、如何なる偈を如何
なる順序で唱へるのがよいか
御知らせ下さい。

また舍利禮文、般若心經、懺
悔（長跪合掌）、阿彌陀如來
陀羅尼などは如何なる時に誦す
べきか御教へ下さい。

答

（吳市・北迫・三上生）
日常勤行法に就ては
今月號から其解説を掲
載することになつて居りますか
ら、それを御覽下さいまし。ま
たその經本は色々出來て居り

く、差迫つて居る自分のほかな
さに對する認識が足りないから
なのです。

ましていくらかも賣つて居ります
から御買ひになつては如何でせ
うか。東京では芝區芝公園大東
出版社發行「淨土宗日常勤
行式」一部拾錢送料三錢、同芝
公園七松田印刷寮發行「淨土宗
法要式」一部五錢送料三錢、小
石川區表町淨土教報社發行
「淨土宗勤行式」一部十二錢送
料三錢です。京都なら祇園下豐
田愛山堂などでも賣つて居りま
す。

また「舍利禮文」は火葬の時
とかお骨上げの時とか、または
お釋迦様を拜む時とかなどにお
讀みになつて結構です。般若心

經」は神棚とか神前とかの法樂
の時に誦經するのが普通のや
うですが、宗旨に依て色々異り
があります。阿彌陀如來陀羅
尼は「阿彌陀如來根本陀羅尼」の
ことでせうが、淨土宗眞言宗な
どで用ゐて居ります。淨土宗では
葬儀の行列の時などに使用する
やうです。「懺悔」には廣略
の二がありますが、如何なる時
でもよろしいでせう。また南無
阿彌陀佛を三唱一禮して何邊
も禮拜して懺悔する方法もあり
ます。長跪合掌と云ふのは禮
拜に三通りある中、中品の禮拜
を指して居るので、坐禮は下品
立つてすはつて禮をするのを五
體投地禮と云つて上品の禮拜
として居ります。四肢と頭とを地
につけるのです。支那の家理
教では全身を長くのばして手も
ズツと前の方へのばしてする禮
拜があるやうです。

信 仰 之 相 談

御盆ごぼんの墓参はかまゐりと

神様・佛様のこと等

問

(問) 御盆にお墓へ参り色々
 御供物をしたり、燈籠
 を献じたり致しますが、一方お
 精霊棚へ御霊が来て居て、お
 墓の方は御留守なのになぜそん
 な事をしますのですか。

次に佛教は何處までも行詰らないが、其反對に基督教は行詰ると申します。其點を御説明下さいませ。

次に、神様と佛様との區別に
つき、佛様はどんな働き、神
様はどんな働きをなされるか、
誌上で御知らせ下さいませ。

答

(京都・一青年)

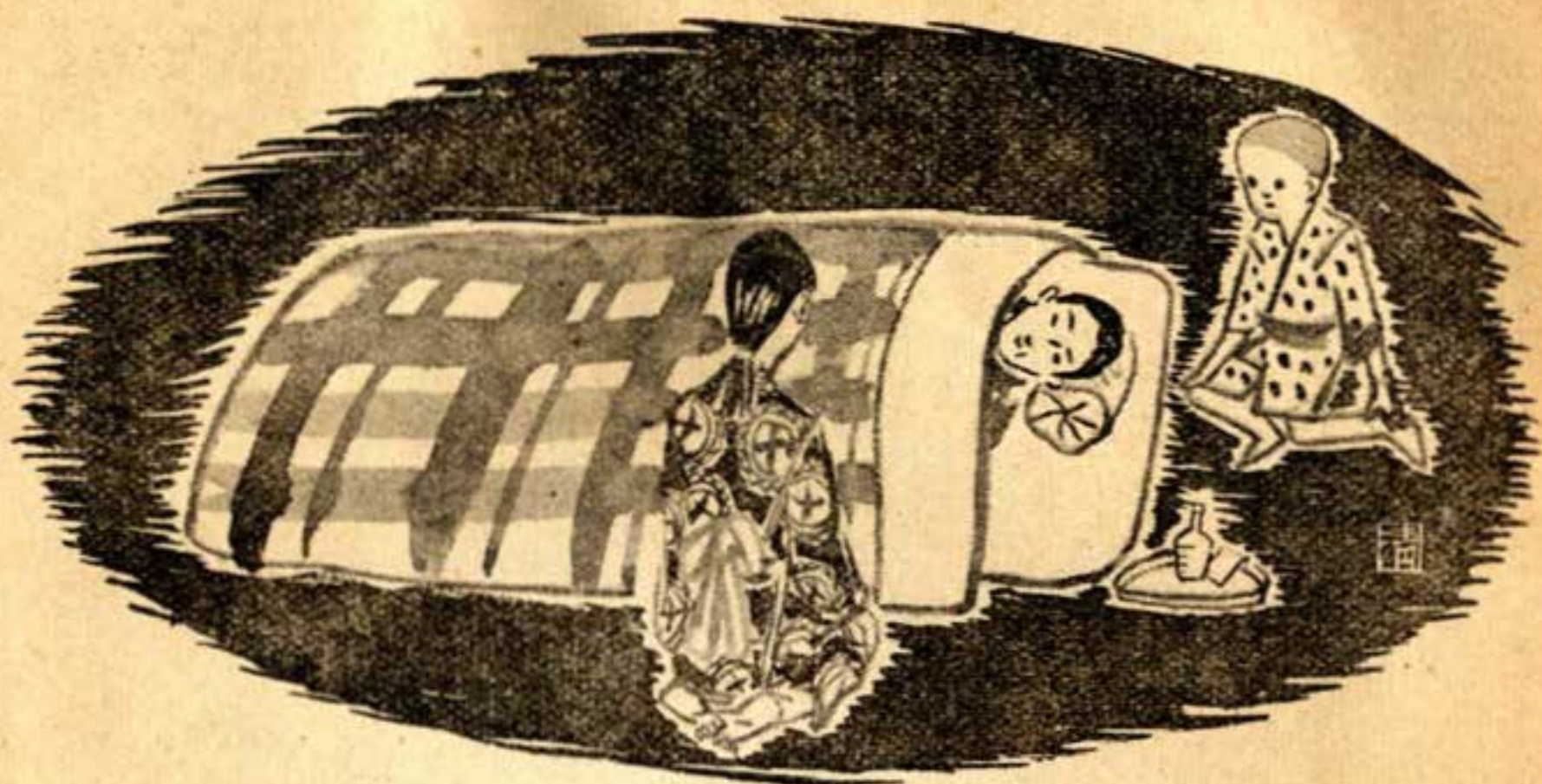
初めのお尋ねの御盆の時お墓は留守か留守でないかと云ふことですが、御霊

が來るとか來ないとか云ふ事は
 物質的な物の問題ではなく「來
 現」または「應現」と云つて、
 此方の志に應問して現はれ來
 るのでありますから、お精靈
 棚にお迎へすれば其處へ應現し
 お墓で御まつりすればお墓にも
 應現するので、こつちへ來て居
 るから彼方がお留守と云ふやう
 な、質的量的なことではあり
 ません。御混同なさらぬやう。
 次の問題の佛教は行詰らない
 が基督教は行詰ると云ふことで
 すが、之は何誰が云はれたのか
 そしてそれは何を根據にして云
 はれたのか判りませんので、其
 責任まで私の方で背負ふ義務
 もないと思ひますから、基督教

のことに就ては御遠慮して置きませう。然し佛教々理は確かに行詰らないものと信じて居ります。佛教の人間生活に求むるところは「中道」であり「無我の大道」であり「全分の利他行」であるからです。一切を抱擁するところ、其處に無礙の大道坦々として開け行くのです。

第三の佛様の働き神様の働きに就ての問題は之も神様とは何ぞやの問題から決定してかからないと御答が出来ません。世界到るところに宗教があり、其宗教には一神か多神か兎に角「神」があります。學問上から云へば佛教の佛様も「神」であります。しかもその神に對する信奉者の觀念は凡俗民情及び文化の度を異にする爲に、決して同一なものではありません。例へば我國に於ける「神」の觀念は「上」であつて「人間

以上」とか「凡人以上」とか「うへ」云ふ意味が多分にあります。だから兄様のことを「子の上」と云ひ、頭の上にあるものを「髪」と云ふなど同じ思想から來て居るのです。だから日本の「神」と基督教の「神」とは全然異なるものです。基督教では傳道上其國の言葉をかりて、假りに云つて居るので、日本でこそ「ゴツド」のことを「神」と云つて居りますけれども、支那では神とは云はず「天」と云つて居る譯です。だから神様の御働きと云ふことも簡單に申上げることは出来ないのです。然し佛様のお働きのことを端的に申し上げますれば「佛心とは大慈悲是なり」と云ふ經典の言葉が示すやうに、一切を抱擁し攝取しつゝ、然かも一切を向上せしめんとするのが佛様の御働きです。



話 童

電

報

高

橋

良

和

文

齋

藤

清

繪

病つかれたお母さんの枕元にお醫者さんが坐つてゐました。もう一日経過をみませうと昨日歸つて行つたその今日なので、側に坐つてゐるみつ子や、和夫にとつてはお醫者さんの一つ／＼の言葉がお母さんの容體を動かす様に思へてなりません。藥罐の蓋から湯氣が立ち始めて冬には遠い此の頃、白く部屋の中をつゝんでゐました。

「こりや矢張りいかなですなあ、このまゝにすますとますます悪化するでせ

う。今の内に手術するといふと思ひますが」

と、ときれ／＼に言つたお醫者さんのことばに覺悟はしてゐたみつ子と和夫でしたけれども胸になんだかかたまりが出来た様に思へました。

「先生命には」

とすぐその後をみつ子はきゝますと、聴診器を靴に入れながらお醫者さんは、

「なんとも申しかねますがまあ大丈夫と思ひます。それに私の世話する病院

なら、友人も澤山ゐますから」

親切に云つてくれました。

「え、ありがたうございます。それぢや病院へ入れていたゞく事に致します」

とみつ子は云ひますとお醫者さんは處方箋の裏になにやら手紙を書いてくれました。

「あの先生あしたの終列車でまゐるつもりですが」

「身體もあまり衰弱してゐませんから大丈夫でせう」

と立ちあがりながらこう云ひました。

お醫者さんがかへつたあととお母さんの枕元に坐つた二人の姉弟は青ざめたお母さんの顔をのぞきながら

「お母さん病院へはいるの」

「手術するの」

と心配そうにきゝました。

「うん、先生があゝおつしやるから」

つ病院へ這入つて手術をしていたゞくが大丈夫とは思ふけれどももしものことがあつたらすぐ電報をうつから二人してかけつけてきてくれるんだよ」と云つたお母さんの目にはもう泪さへ浮んでゐました。

「うん僕かなしいや」

と和夫がつい泣き出しますと姉のみつ子も思はずほゝと顔にほてりを覺えました。

あしたの終列車だと思ふとその晩はこの三人にとつて本當に短いひと時の様な氣が致しました。かけひの水が庭の水だめにおちる音さへ今夜は耳たぶにこびりつく様でした。

「これ、もうおやすみよ」

とお母さんに云はれてぢーと目を閉ぢてゐる間にウト／＼としてうたゝ寢の時をすごして朝を迎へました。

一日中親類のおばさんのお手傳で病

院へもつて行く布團から、着物からすつかり荷造りしてゐる内に終列車の出る九時の時刻になりました。

「それぢや行つて來ます」

とおばさんに手をひかれて行くお母さんのうしろから堤防づたひに村の停車場にやつてまゐりました。平素から淋しい停車場に終列車とあつては尙更乗する人もありません。

ガランとした古い型の客車が横付になりますとお母さんとおばさんとはその窓邊によりそつて二人の姉弟をぢーとみてゐました。

「わかつたねえ、電報を、手術のあとわるいときにはね」

ともう一度念をおして云ひました。

汽車の窓あかりがみえなくなるまで手を振つて送つたみつ子と和夫は、もうなにも云ふ元氣はなしに重い足を引きづつて家へ足をふみ入れたとたん、

「ねえ、うまく行くだらうか」
と和夫は聞きました。

「そらよ電報さへこなかつたらなあ」
とみつ子はすぐ答へましたけれど心の
内にふるへるおのゝきをかくす事もな
りません。

「和夫ちゃんもう寝よう、手術は二三
日かゝるから、きつと電報はこないで
せう」

と一人で心をなぐさめて姉弟は床には
入りました。けれどももしもお母さんの
具合が悪くなつたら、自分は弟は、
お家はと、考へると、もう目がさへて
眠られそうにありません。

「姉さん、電報ていやねえ」

と和夫が云ひますとつい姉のみつ子も
「今頃お母さんは何處だらう」

と小さい心の中におしよせてくる不安
を言葉でまぎらしてゐました。まんじ
りとも眠らないで夜があけて次の朝が

來ました。臉をは

らしながら起きた

みつ子と和夫でし

た。起きて話し合

ふのはお母さんの

ことだけしかあり

ません。お仕事も

手につかないで一

日終りました。そ

してその次の日も

その次の日も同じ

様なおづくした

氣持でよくつた四

日目、丁度お母さ

んが手術する日に

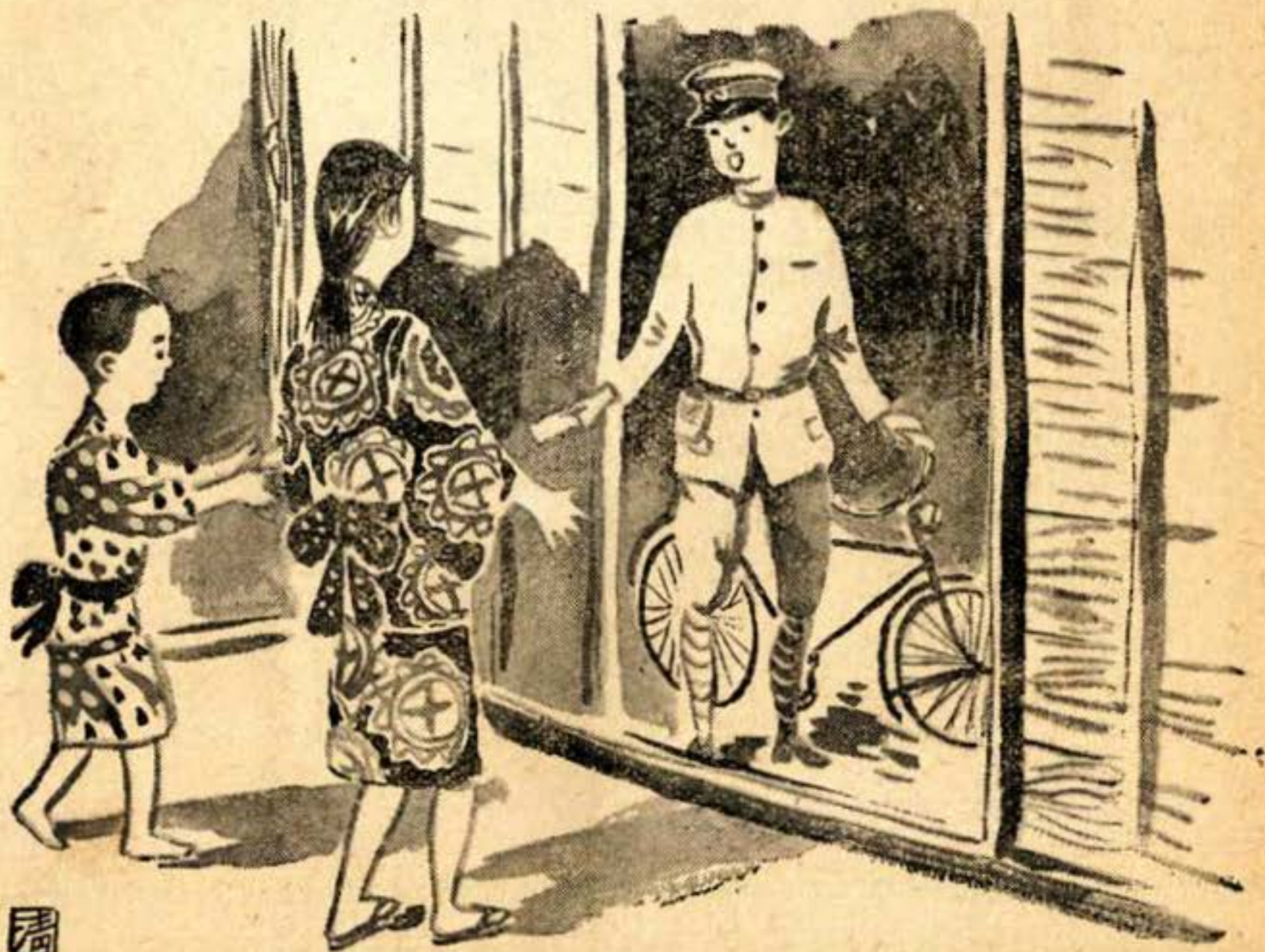
なりました。

「お母さんの手術

今日よ」

とみつ子が和夫に

そのことをしらし



たのは夜でした。

夕方まで電報が来なくつて、二人はやれ／＼と云ふ氣持で「今晚はよく眠れるぞ」とすつぽり布團をかむつて目を閉ぢてから間もない時刻、終列車が村の停車場を離れた汽笛が響いてゐるそのあとからガツチリしめた表戸を下／＼とた／＼く人があります。寢がへりをうつ拍子に目をあけたみつ子はち／＼と天井をにらみますと、成る程、戸をた／＼いてゐる音です。

「どなた」

と小さな聲で聞いてみますと、その返事が以外にも大きな聲で

「電報」

と云ひました。これ聞いたみつ子はフラ／＼として来た頭をち／＼とさ／＼へてとなりでやすんでゐる和夫をゆり起こしました。

「和夫さん、電報ですつて」

と云ひますと同じ様に目を開けた和夫も

「姉さん、矢張り」

と身體をぐんにやりみつ子の方にもだれかけました。

「しつかりするのよ、たとへお母さんがもしものことがあつてもきつと二人してしつかりやりませう」

と云ひ残して臺所をおりて行きました。ガラ／＼と表戸を開けてみますと、月あかりに赤い自轉車を戸口にもたせかけて電報配達夫が立つてゐます。そして

「井上さんのお家ですか」

と云ふてゐます。

「えい、そうです」

とふるへる手つきでうけ取りますと、電報配達夫は飛ぶ様にかへつて行きました。電報をあける勇氣もなしに漸くのこと電燈の下に坐つたみつ子は疊の

上においてうらめしさうにそれを見守つてゐますと、和夫は、

「姉さん、讀まないの」

とさいそくしました。

「えい、この中に書いてあることがおそろしい」

とみつ子は云ひましたければ矢つ張り讀まないわけには行きません。立ちあがつてほの暗い電燈の下でのぞきこむ様にしてみる和夫とその電報を開けてみました。そして一字／＼胸にきざむ様に口の中で讀んでみて、ぐ／＼と調子を落として

「シユジツブジスンダ ケイカヨシ」

と讀みあげました。せまる様な思ひで息をひそめてゐた和夫は

「なんだい。電報の奴びつくりさせやがらあ」と云ひながら大聲で

「シユジツブジスンダ ケイカヨシ」

ともう一度讀みあげました。

實話 迷信と正信

念佛部隊後日譚

綾部 華子

それは丁度昨年秋の召集に増上寺に部隊が滞在した時の事です。いつか本誌に發表されました「念佛部隊」の記事で已に御存じの事ですが、あの部隊が始め増上寺に宿泊した頃は、お寺に泊り合した事が大へん縁起が悪いといつてさん／＼こぼしてゐたものです。

お寺とか、坊さんとか聞くともうすぐ「死」を聯想して、行く先の不幸を事々にかこつてゐました。

私は、前々から増上寺の晨朝會や修養會にはかゝさずお参りしてゐましたので、その時も兵隊さん等の接待に毎日詰めて働かして貰いてをりました。

そして幾度か兵隊さんたちの「縁起でもない」と言ふ暗い豫想に對する不平の言葉を聞いては、何とかこの人たちに明るい信念を持たせて戦地へお送りしたいといつも考へてゐました。

その隊の中に佐藤と言ふ上等兵（たしか佐藤上等兵と記憶してゐます）がゐましたが、大へん理屈屋で、いくら念佛の功德を説いても、淨土の信念を話しましても一向にきゝめがありません。そして私を見る度にお坊さんの悪口を言つたり、佛者と死の迷信について理屈ばかり云つて困らせるのでした。

私も斷えずお念佛を唱えて念佛の功德を信

じ、淨土の信念を固く持してはをりますが、深い理屈についてその人を説きふせるだけの力がありませんので、或日も、佐藤さんを相手に困らされてゐる所へ、増上寺の上座のお坊さん（特にお名前を匿す）が通りかゝりましたので救ひを求めました。

そのお坊さんは、何か暫く説いておいでになりましたけれど、「それでは明朝から晨朝のお念佛にお参りして下さい、次第に何か得るものがあれば幸いです」と言ふ事になつて、佐藤さんは次の朝から大殿に出てお念佛を申す事になりました。

始めは冗談の積りであつたのでせう。而し一日續け、二日續ける間に、佐藤さんの眉宇に眞剣なものが漲つて來ました。木像がどうの、愚像崇拜がどうのと理論づくめで悪口ばかりおつしやつてゐた佐藤さんが、一朝もかゝさずその偶像の前で念佛する姿は他の兵隊に奇異な感を抱かせずにはおきませんでした。

その内佐藤さんが、珠數がほしいと言ひ出しました。佐藤さんのそうした眞剣のお顔を

見ると私は自然にうれしくなりました。

そうした理屈を超越した業に徹した信念の強さから佐藤さんに或力が備はつた様な氣が致しました。そしてこの珠數がほしいと言ひ出した頃に已に繰起でもないと言ふ暗い寺、お經、坊さんと言ふ様な概念は勿論なくなつてゐたのです。

「増上寺の念佛部隊」として全隊員珠數をかけて出征される迄にはこうした數々のエピソードがありました。

丁度その頃私は、法主大島僧正に一丈四方位ひの大きな紙の中央に「南無阿彌陀佛」と御染筆願つてその紙一面に何萬と數限りなくお命號を書き始めました。そして全面が眞黒になるほどに書きつめた時に私の甥の河野榮吉（千葉、大原町）の召集になりました。

甥一家は信仰のない者たちばかりで、私のそうしたお寺の贈りものをあまりよろこぶ様子もありませんでしたが、それでも出征の榮吉は肌身につけて行つてくれました。

榮吉が出征した後、私は河野家に未だお墓

のない事に氣づいて極力建立する事をすくめましたが、一向うなつきません、そこで私は、無理に私の檀那寺（浅草宗圓寺、住職藏田徳



元師）の方丈さんに名號を揮毫して頂き、東京で石碑を作つて千葉の大原町まで運んで建てさせました。

おせつかいな事をすると言ふ風な顔つきを

してをられました。そして宗旨の違ふお墓處の中に、ボツンと南無阿彌陀佛の名號の墓が建てられたのも奇異に感ぜられましたが、私たちの心眼には或種の落き、よろこびが漲りました。

「之で氣がすんだ」と一安堵して歸つたその日「敵城一番乗りの感激」——河野工兵一等兵の殊勳談——と言ふ記事が東京日々に發表されたものです。

私は迷信の様にこの日の二重のよろこびを結びつけたいものではありませんが、きつと彈雨の中をくぐつた甥が力強い信念に生き始め工兵乍らも敵城一番乗りをするほどの生死を超越した境地になつたのも名號の力によるものと信じてゐます。

（因みに綾部さんは始め念佛婆さんと、世間から言はれ奇異に思はれてゐたが次第にその篤心が自然に通じて人々を法の道に導いておられます。御主人もやはり強い信仰の人、かつて雪岸島の復興に身命を賭された方と聞いてゐる。）



大森飛行機墜落事件

遭難者の臨終

故勝野紀郎母 積 恵 手記

積穂さんは遭難者の一人である紀郎氏の
お母様で信州飯田在の會地村の方であります。
御主人は本年七十五歳になられるさう
ですが、二人の間に子がないので廿一年前
に、山本村の所澤家から四男の紀郎氏を
養子に迎へ、全くの實子のやうに「これこ
そ神佛より授つた我子」と思ひ非常な慈愛
の中に養育した甲斐があつて、紀郎氏は一
方ならぬ孝行者となり近所の賞め者でもあ
つたさうです。十五の年に御主人の弟さ
んが、東京の芝三田四國町に相當の商人と
なつて居られるのを頼つて、將來商人と
なるべく仕込んで頂くことになり、もう既
に今年で、在京七年と云ふ年月が流れたの
であります。孝行者の紀郎氏はその七年間
に二百三十餘通と云ふ澤山な手紙を御兩

親へよこされて居りますが、唯だの一邊の
不平がましい事は云はず、何時も何時も「自
分は無事に働いて居るから御安心下さい。
一日も早く成功して御兩親に安心させたい
と思つて居ります。何卒それ迄は御健か
で居て下さい」と、僅かではあるけれども
御主人から頂いたお小遣をさいてはお父
様の好きな品を送つてよこしたり、お母様
には「無理をしないやうに」と云つてはお
小遣を送つて呉れるのでした。唯だもう「ど
うしたら親が喜んで呉れるだらう」と云ふ
事のみが紀郎氏の念願だつたらしいので
す。それでたまに親の方から何が送つてや
ると「私は御主人の情で少しも不自由し
て居りません。私にかまはず御兩親様方
こそ御自愛なすつて下さい」と云つてよこ

す程で、實に孝心厚く、また主家にも眞剣
に實によく働いたさうでございます。去年
の七月に徴兵検査で故郷へ歸つた時も、
其立派に成人した姿に御兩親は大變な
喜びやうで、孝心深い人格の豊かさに親
戚の人達も皆な褒めて居たさうですが、山
本村の實父母の處へも連れて行つて初め
て名乗りをさせたが、實父母も大變喜んで
生みの子の立派な心掛けに感心したとの
ことです。その十日間の滞在も夢と過ぎ主
人持の身の歸京せねばならぬので、お母様
が飯田驛まで送つて行くと「お母様。使ひ
残りの小遣を佛壇の中へ置いて來ましたか
ら、紀郎と思つて御使ひ下さい」と云ふの
で、お母様はそのやさしい心根にすつかり
泣かされて「私のやうな何一つ親孝行もし
なかつた者に、何うしてまあこんな孝行の
子が授かつたのであらうか。之も日頃念ず
る御佛様の御蔭に相違ない」と思はず感涙
にむせんで合掌したと云ふことです。其時
汽車が來たので紀郎氏は「お母様。御上京
の時は僕がお迎へに参りますよ。では御機
嫌よく、さようなら」と別れの言葉を云は

れたが、神ならぬ身の之が永遠の別れにならうとは思はず、お母様としては今も尙ほ忘れ難い思ひ居の情景であるさうでございます。

お母様は七年前に旦那寺の淨久寺で五日間の「お別時」のあつた時、始めて信仰に入り、其後數回の別時に参加しては御自分の信仰の増進を計つて居られますさうです。御手紙に「今までの凡夫姿が耻かしく日々懺悔の念強くよりよく生きんものと、且つまた遠く離れて居る愛し子の無事を祈りつゝ念佛に精進して居り淨久寺の方丈様（兼子達門師）には篤に御懇切に御指導を給り、喜びの中に日々念佛に精進致して居りますれど、煩惱の何時晴れることもなく罪深き身を歎いて居ります」とありましたが、それ程までに我子の無事を祈つて居られながら、悲しい哉、過日の大森に於ける飛行機墜落事件に遭難され、いと子紀郎氏を失はれてしまつたのです。何と云ふ御氣の毒なこととせうか。以下はその紀郎氏の母上積惠様の手記で御座います。何うかお讀みになられましたならば御同

情を以て一邊の御回向をして上げて頂きたいものでございます。御法名は最勝院孝譽善忠紀郎居士と申されるさうです

カツト寫眞は故紀郎君（中村辨康記）

× × × × × ×

「キロウケガシタスグキテクレ」

こんな電報が八月廿五日午前九時に飛込んて來ました。

「はッ」と胸を衝かれて、一度に天地がひつくりかへつたかとはかり驚きました、今も今とて神佛に我子の無事を祈つて居たのに、まあ何と云ふ事でせう。

然し私共夫婦は「この時こそ」と佛壇に向ひお燈を上げて暫く念佛し續けて居りますと、少し氣も落着いて參りましたので、主人には直ぐ出發して頂き、私は神佛に祈願して親戚へも知らせ、第二の報らせを待つて居りました。すると

「ヒコ一キオチヤケドシタオモシ」

との後報に、さては昨日のラヂオで「大森に飛行機が墜落して多數の死傷者を出した」と

の放送があつたが

「我子もそれに加はりしか、さても一大事よ」と思ひ直様私も上京致しました。こちらから東京までは九時間かゝります。汽車は夜行でしたが、我子の上を案じて一睡も出來ず、心中に唱名念佛し乍ら、汽車の歩みももどかしく翌朝七時に大森の蒲田病院へ着しました。室内に入りますと、我子を見るも無慘な姿と變り果てゝ居りました。

上半身はスツカリ繃帯に巻かれ、唯だ眼と鼻と口だけ出して居ります。また足の方も繃帯されて居ります。

「何と云ふ憐な姿か。あの人並すぐれて美しく生れ付いて居たのに……」

私はあまりの事に危く倒れるところでした。

「紀郎や。お母さんです。判りますか」

「よくわかります。大丈夫ですから御安心下さい」

下さい」

氣は中々シツカリして居りました。

然しそれからの私は丸で夢中でした。

「如何にもして此子を助けたい。此子死なば共に逝かん」

と、そののみを思ひつめて居ました。

御店の御主人を始め親戚の方々も御集り下さいまして、醫藥上看護よと何一つ不足とでもなく此世の中に有りと有らゆる手當を盡して下さるのでした。殊に御主人御夫婦は、如何にもして助けたいものと我身も家も打捨てゝ、病中をもお厭ひなく御看護下さいますし、紀郎の伯父様や御兄様方も遠方から御越し下さいまして御看護下さいます。私は唯だ唯だ泣くばかりでした。皆様の此有り難い御厚意の程を感謝して唯だ泣くばかりで御座います。そして心には始終合掌して居るのでした。病室内は病人のうめき聲のみであります。そして求めるものは水ばかりであります。一時間置にするカンフル注射及び食鹽注射、そしてまた輸血も致します。本當に勿體ないくらゐで御座います。然し乍ら、何分にも身體の三分の一以上も焼けたゞれて居るのです。

「さぞ苦しい事でせう」

と思ふと、親として此のいたましい愛しい我子の姿を到底正氣では見て居られません。

「紀郎に罪あらば我をとがめよ神々よ」と日頃念じて來ました甲斐もなく此なさけない姿は何事でございます。私は氣も狂はんばかりの思ひでございます。

「此の世の中に神も佛もあるものか。此子の成長を樂しみに如何なる苦勞も厭はずに、晝は日ねもす思ひ續け、夜は夜もすがら夢にまで見ては樂しみ樂しみして來たものを今此處で別れると云ふならば、もう生きる甲斐は少しもない。幼少の頃から此子逝かば共に逝かんと思ひつめ思ひつめして來たのだもの。それが今此處に來たのか。神よ。佛よ。どうぞ御助け下さい。神よ。佛よ。……」

餘りに悲しくて涙さへ出ず唯だ我子の顔ばかり眺め悲愴の思ひの内に、其廿七日も暮て仕舞ひました。

紀郎も苦しい中から兩親の顔のみ眺めて居

ります。其眼は苦しきやうであり悲しきやうであります。それを見ると私の胸ははりさけさうで御座います。

その私の姿が餘りに狂態であつたのでせう。親戚の方が無理に私に催眠劑をのませて下さいました。

その藥の効と身心の勞れとでツイうとうと何時とはなく眠つて居りました私は、夜の二時を打つ時計の音に、ハツと眼を醒ました。見れば付添ひの人々は皆な眠つて居ります。

「あゝ、此處は控室だな」
と思つてフト夫の顔を見ると、夫もたつた三日間の悲しい看護に、頬はこけ衰へてウツウツと眠つて居る姿の、如何にも哀れで一層悲しうございました。

「私が若し紀郎の跡を追つたならば、此老人を誰か世話するであらう。またあの孝行者の伴が母を道連れにしたいとは必ず思はないであらう。それにまたあの子は國家發展の爲に犠牲になつたのだ。云はゞ立派な

死であると考えなければならぬ。あの子は御主人の商用のため、芝區から三里もある大森の某工場へダットサンで荷物を引き渡し、將に歸途につかうとした時、目前に飛行機が墜落したので、人助けにかけつけると同時に爆發されて、かゝる災害を被つたのではないか。あゝ、そうであつた。そうであつた。私は何と云ふ愚か者であつたであらう。愛する我子の死に、前後を忘れ取亂して、若しも誤つた事をしたなら、家名を傷付け、多くの人々に御迷惑をかけるばかりでなく、老いたる夫を苦しめ大切な我子を地獄に落すのであつた。あゝ誤つた。誤つた。それよりも之から一心に念佛して命旦夕にせまる紀郎を極樂淨土へ導くのが眞の親の慈悲ではあるまいか」

と、始めて氣が付きましたので、直ぐ飛び起きざまに、天を拜し地に伏して、

「如來様。よくこそ氣付かせて下さいました。あやふく私は人道を踏みはずすところでした。ありがとうございました」

と、涙の中に念佛するので御座いました。それから靜かに病室に行きますと、紀郎は今が今まで母の眠ると共に靜かに眠りに就いて居たのださうです。

人の入り来る音に大きな目を見開き私の顔を見つめて居ります。

「紀郎や。よく眠れましたか」

「よく眠れました」

「少し氣分がよろしくば御話しませうか」

「お母さん。御話しして下さい」

「お前の今度の災難は國家の爲の犠牲ですから心を安めて下さい」

「お母さん。さうです。僕は人助けの爲に飛び込んだのです」

「お母さんは御前の孝行を何時も感謝して合掌して居ります。」

「お母さん。何を云ふのです。僕は子ですもの、當り前の事ではありませんか。然し先立つ不幸をお許し下さい……」

「紀郎。しつかりして下さい。お母さんと呼んで下さい」

「僕、もうお別れです。お母さん。お母さん。お母さん……」

あゝ、これが「母」を呼ぶ言葉の最後でした。

それから父親と二人して一心に念佛して居る間に、次第に落着いて參り、當人も苦しい中から共に念佛唱名するのでした。

さうかうする内、或は眠り或は念佛し或は昏睡状態と云ふやうに行きつ戻りつして居りましたが、斯くして正氣に歸りましたので父親が、

「紀郎々々。シツカリして呉れ。……お前には長い間苦勞をかけてすまなかつたね」

「お父さん。僕、今死んでは残念です。……だがもう頑張れない……然し定命だから諦めて下さい……」

此時は當人も最早此世の名残りと思つたので御座いませう。並み居る親戚の方々の名を一一に呼ぶのでした。さぞ暇乞ひのつもりだったのでせう。

「之で安心した。之で安心した」

と二言申しました。

それで、皆様には一旦引いて頂き、私共二人だけが左右から、愛子の肉體を救ふことの出来ない悲しみの心で、せめては魂なりとも彌陀の淨土へ行くやうにと一心に念佛するのでした。

當人もそれに連れてかすかに唱名して居りました。すると其内に何とも云へぬ不思議な靈感に打たれたので御座います。これこそ御淨土から三尊の如來様が御來迎下さった事と固く信じます。それは言葉では申されませんが、實に靈妙な感動でございました。

それから安靜の状態で暫く靜かに眠つて居りました。

と、突然でした。高聲で何事かを云ひ出しました。「君が代」だったのです。聲の調子が高くて苦しうでしたから、少し助聲してやりますと、三回ハッキリと謳ふのでした。

之には皆様も驚かされたやうでした。

私共は嬉しさの餘りに泣かされてしまひました。暫くしてから

「さよなら。これでをはり……」

とかすかに申しまして安らけく永遠の眠りにはいりました。小さいながらも御國の爲の犠牲になつたことを喜んだのでございませうか。

「廿二歳の青春盛りをかくも無慘に散らしてしまつた事は、如何にも残念ながら、これとて運命なれば是非ありません。生みの御兩親様や大恩受けた御主人様に萬分の一の御恩報じもせずに、先立つた事は、さぞ心残りであります。然し今はお淨土から皆様の上に幸多きやうお護りして下さいね」

と心に念じつゝ、愛し子の遺骸を茶毘に付して、其遺骨を抱き乍ら、我家に歸り行く私共兩人の心が、何んなに悲しく何んなに淋しかったか、それは皆様の御想像におまかせ致します。

生者必滅 會者定離

本當に悲しい事でございました。

國へ歸りますと、これは又、親戚一同及び

御近所の方々が、大層御心配下さいまして、神に佛に、或は祈願し或はお百度を踏んで、生命の安全を祈つて下さつたさうで、その厚きお情の程、誠に感謝の外はありませんでした。運拙くして逝ける我子は、此皆様の眞實を如何に嬉しく如何に有り難く感じましたでせう。

私共は子供の死に依りまして人様の眞當の情を知る事の出来た事を感謝すると同時に、其方々の御恩の萬分一を報ぜねば相濟まぬとツクツク感じたのでした。

そして念佛の有り難さをシミジミ感ずることが出来、その上、眞の信仰を悟ることが出来、ハッキリと永遠の生命を悟りました事を本當に有り難く思つて居ります。

紀郎の肉體は消えても靈魂は淨土から遙かに私共並に御恩を受けた方々の上を護念して呉れることでせう。

私は深く深く之を念じ慈々益々念佛に精進致したいと、それ以來一層唱名にいそしんで居ります。



りよだ友誌

支那奥地にて

北支派道 木村英禪
〇〇部隊

(前略) 小生、山西、西北等の討
匪行に参加致しておりました。各
地方の宗教状態もよくは分りま
せんがたゞ俗的な廟なるものが各
部落にあるのと山西奥地の赤化思
想の徹底してゐるのには驚きま
した。
石佛寺など拜見しましたが荒廢
してゐました。
包頭の二ヶ月の生活ではたい
街を行く老若男女が手に念珠を持
つてゐるのを見ておどろきまし
た。紅十字會員も相當ございま
した。救世軍も此の近邊の村落に

は相當根強さを持つており、一村
救世軍などと言ふ村もありまし
た。

石佛寺の山門に「舌頭」「念佛」
の四字が刻されております。この
念佛は何を意味するか分りません
が南無阿彌陀佛の寶號は人の口に
登つております。南海佛堂など六
字が書かれております。張家口
のある靴やはお名號がかざられ
てゐるのを見うけました。

大同にも厚和、包頭にも内地の
移民が多く淨土の宗徒も多く見
けました。討伐の途中よく歡迎な
どする住民の中に佛教會と言ふ
様な團體を二、三回見うけまし
た。若い者が多い様ですが此等は
實に指導者なくたゞ佛教會と言
ふ新組織によつて何か今後に求め
んとしてゐるかに見えました。我
が宗なども此等の求めてゐるもの
に何らか與へなければならぬと感
じました。

最勝人の往生

廣島 吉満淨玄

渡邊益夫氏は尾の道商業學校
卒業後臺灣の日米商會に勤務精
勵してゐましたが二十三歳の時
病魔に犯され郷里に歸られ、以
來病床にあること十年、その間
近親一同治療に手を盡されました
が少しも効果がありませんでし
た。が二三年前から淨土を愛讀し
て猛烈な淨土宗の信仰を獲得し、
病床にあつても不斷念佛をして
ゐました。

然る處昭和十三年八月五日家
族の者に向ひ「今まで私ほどの親
不孝者はございませんでした。罪
業深い私ごときものに神も佛も
お助けして下さらないでせうが、
唯私は明日から大きな聲で念佛
申しますから決して驚きあわて
ない様にして下さい。私は決し
て死ぬるのではありません五百年
も千年も生きてゐますから御安心

下さい。」

と言ふて毎日念佛してゐました
が八月十七日午後三時頃家人に
向ひ「阿彌陀様が向ふの山の峯迄
お迎ひに来て下された」と言ひな
がら稱念しつゞけましたが同午
後四時半念佛の聲がきれるとその
まゝ大往生されました。

死顔は特に笑をふくみ生ける如
くでした淨譽壽眞居士渡邊益夫氏
は三十三歳でした。御社發行の淨
土を二、三年前から私が拜讀した
後を渡邊氏に進呈したのを大へん
よろこんで愛讀されたもので、淨
土が結んだ無信心者への佛縁を深
く感じ、愚筆を以つて有のまゝを
記し送りました。合掌

機を忘れる

京都 中村鶴之助

機關紙淨土を拜讀出來うるを
幸福に感じます。特に吉田先生の
聖境に一ヶ月間積る凡俗の穢れ
の洗ひ去らるゝ思ひを深くします

銃後運動ニユース

立派に出来上つた！

應急面の講習盛會

明照會館樓上で

去る九月二十八九兩日午後一時から本會婦人部では、防空化學研究所推薦講師伊藤戒圓氏（板橋練馬稱名院住職）を招いて、明照會館樓上に簡易防毒マスク製作講習會を開催した。

會員十餘名、當日愛婦、國婦兩婦人團體の参加者も二十餘名あり頗る盛會であつた。

時局に際してこつした試みは始めてであつたのと、一個五六圓も出さねば買へぬ防毒マスクが、廢品を利用して高々壹圓二三錢で完全に簡易に出来上るの

で、非常に好評を博した。

本部編輯員 東慈道君

勇躍征途へ！

辻少尉は既に戦線に

十月七日突如本部員東慈道氏に應召通知があつた。補充であつた同氏には全く突然の事であり、本會の要職にある氏を失ふ事は、相當の痛手であるが氏の後は部員一同が頑張つて補填する事になつた。

氏は十月八日夜十時東京驛發福岡の師籍に向つたが、同夜見送りには里見執行始め淨土宗重役各位、吉田絃二郎氏、其他多數盛大の歡送裡に勇躍出征十月十日〇〇聯隊に入營され元様一つばいで教練にいそしんでゐる。

今後度々催しをして銃後婦人の任務を果すと同時に、婦人の時局認識を深める事に婦人部は張り切つてゐる。

尙、十月三日には同婦人部高瀬磯子氏宅で再度講習をなした。

眞野師經過良久しく病床にあつた眞野正順師は其後の經過極めて順調で御全快の日も近く本部員一同喜びにみたされてゐる。

陸海軍慰問「淨土」
寄附者芳名（敬稱略）

（九月份）

- | | | |
|--------|--------------|--------|
| 四圓 | 山口周南組 | 西光寺 |
| 壹圓 | 京都府乙訓郡大原野村 | 林きく |
| 壹圓 | 函樽教區江久組 | |
| 八圓二十三錢 | 京都上京鷹野北町 | 佛教專門學校 |
| 壹圓 | 大森區新井宿四ノ十九 | 倉田百三 |
| 十貳圓 | 大分縣津久見町 | 宗團十 |
| 八圓 | 大分縣津久見町長泉寺 | 宮本玄哲 |
| 壹圓二十錢 | 東京普通宗學院 | 教職員一同 |
| 壹圓二十五錢 | 宗學院第三年級 | |
| 壹圓五十五錢 | 宗學院第二年級 | |
| 八十錢 | 讚衆養成所生徒 | |
| 貳圓 | 西宮鄉兎町四五 | 阿彌隆寺 |
| 壹圓 | 神戸區中山通七ノ四二九 | 松澤清三郎 |
| 拾圓 | 芝區新橋二ノ八石井德太郎 | |

先きに出征された本部員辻重光少尉も、暫く留守隊にあつて未教育兵教育に従事されてゐた

溢れる熱意！

慰問浄土に應募殺到

先に陸海軍病院の傷つける勇士を慰問する爲に募集された「浄土」誌代は其後相ついで應募者多数あり毎日ひきもきらず浄土宗務所に殺到するが何しろ全國の傷病兵に行き渡るには、未だ其の幾分にも當らず、當事者も本會側も大童で募集中であるが、中には篤信者もあつて毎日多少の額にかゝはらず送金される方もあり、就中小樽直行寺支部の平井善慈氏などは商業の傍ら當市知名の士を叫合して全市に呼びかけこの傷病兵慰問浄土募集に奮闘中である。尙應募には別に規定のや

が、今度いよいよ〇〇に向ふ事となつた。

うなものはなく一口壹圓で振替なり小爲替なりでお送り下されば、受取を差上げ、宗報及び本誌にお名前を發表します。

盛んな信仰座談會

中村辨康師を講師に 會を重ねて會員激增

本會理事中村辨康師を中心とした信仰座談會は別項案内の通り本郷東片町美容大學院に於て願主橋本樂榮女史の御骨折りによつて毎回盛大に行はれてゐるが、去る十月九日(日)午後七時より第

浄土宗内局改組

執綱に里見達雄

野上運外師執綱のもとに組織されてゐた浄土宗内局は十月三十日任朝満了重役の改組が行はれた。

執綱に前庶務部長里見達雄師、教學部長に江藤徹英師(留任)庶務部長に前主事矢島春道師財務部長に木村玄俊師、主事に安井大學師がそれぞれ就任された。

三回が開催され、三十餘名の出席があり頗る盛會であつた。中村講師「念佛」の題下に一時間話され後質疑の應答がなされ、九時半散會した。別項(三五頁記載)の案内御参照、御來會下さい。

貳圓 芝區新橋二ノ八 石井とよ
壹圓 山形小松町 常念寺
五圓 堺熊野町東五盛宗寺中勇教
壹圓 麻布區本村町 猪山よの
拾八圓九十錢 本郷區蓬來町 難波英受
拾五圓 神奈川教區

(五十錢づゝ三十ヶ寺)

壹圓 佐賀三養基郡北茂安村 大法寺
壹圓 大阪東區上本町四 實相寺
貳圓 和歌山粉河町運行寺 植林哲四郎
壹圓五十錢 金澤市 心蓮社
五圓 小樽市都通 平井善慈
壹圓 西宮市 一讀者
壹圓 廣島雙三郡八幡村 浄土寺
壹圓 山口原狹郡原南村三隅早介
五十錢 芝區中門前町三ノ三 松本小枝

「慰問浄土」に就いては表紙裏にのせてある廣告御参照の上奮つて應募下さいまし。一口壹圓で、幾口でも御自由です。



日常勤行式講讃 (一)

中 村 辨 康

はしがき

日常勤行式の講話は、もう七八年にもならうか、増上寺に於ける五日間の「信仰の集ひ」で話し、後には知恩院の雑誌「華頂」に昭和九年の十一月號から十三回に亘つて毎號二萬からの讀者の御參考に供したので、また更に之を取り上るのも何うかと思つたが、各方面から希望を寄せられる方々もかなりあつたので、強いて筆を新たにしました次第である。

日常勤行式に就て、法式家の堀練雄氏に依れば（教學週報五二七號）

香偈より懺悔文まで序分

開經偈より總回向文まで正宗分

四弘誓願より以下を流通分とし、正宗分を更に分つて

讀經を——讀誦正行

佛を瞻仰する態度を——觀察正行

禮讃を——禮拜正行

念佛を——稱名正行

總回向文を——讚嘆供養正行

の五種正行として居る。

また貞極上人に依れば

「五種正行を以てす。亦た讚嘆正行なり。亦た是れ助正兼行なり。謂く、禮讃は禮拜正行亦た是れ讚嘆正行なり。讀經は讀誦正行なり。稱ふる所の名號は選擇本願の稱名正行なり。」

り。能稱調聲は亦た是れ讃嘆門に當る。一佛二菩薩等は壇上の位次、第八像觀の指南に依る。彼土の眞佛に擬し奉る。本尊を敬禮し奉るは觀察正行の少分に當る。香華燈明及び飲食等の供養は即ち是れ供養正行なり」

とあつて六種正行に別けて居る。法式家の相傳はいざ知らず、貞極上人の解釋の方が一層妥當のやうに思へるが、然し私達素人から言しむれば、必ずしも正宗分だけに限らず終始一貫全體を通じて五種正行を離れて居ないと思はれるのである。

五種正行は御承知のやうに助業と正定業とに別けて、讀誦、觀察、禮拜、讃嘆供養の前三後一を以て信仰を助けるものとし第四の稱名を以て正しく信仰其ものを表現するものであり、且つ信仰増進の純粹な行爲であるとして居るが、其配列の順位から考へると、何うしたつて入信過程の順序としか思はれないのである。

隨て此の勤行法式の順序も入信過程に依て配列されて居ると見て見えないことはない。此法式の作者が如何なる意圖を持つて居たかは知らないが、恐らく佛を敬禮しつゝ信仰を増進すべきやうに精細な注意を拂つて完成したものに相違ない。

佛教の各宗各派何れも法式のないものはないが、首尾調ひ配列美しく整備されたものは外には見受けないのである。一番あ

とから出た日蓮宗のでさへ、讀經の前後に三寶禮と四弘誓願を付けた程度である。無論其宗其宗に於て獨特な意味があつて理由もあるのではあらうが、表に現はれた形式だけを見るならば、此「日常勤行式」が一番完全な形に調へられて居ると思ふ、之れは公平な各宗法式専門家の均しく推奨する言葉でもあるからである。

此「日常勤行式」の解説を試みやうとする者に取つては、かゝる意味からも一種の喜びを感じざるを得ないものである。

近頃單行本となつて居る解説書も出たやうであるが、私はまだ不幸にしてそれを拜見して居ないから、其内容のことは分らないし、また先人の中に解説せられたものがあるか何うかも知つて居ない。

だから或は此解説が法式家の相傳と異なるものがあるかも知れないし、古來先德の意見と相違して居るものがあるかも知れないが私は唯だ讀者諸君の信仰増進の一資糧として下さることを念願して執筆するばかりなのである。

(一)

香偈

(信仰の素地を作らんが爲に先

づ身心を清む)

願我身淨如香爐

願我心如智慧火

念々焚燒、戒定香 供養十方三世佛

願はくは我身淨きこと香爐の如く、

願はくは我心智慧の火のごとく、

念々に戒定香を焚燒して、

十方三世の佛を供養したてまつる。

(意譯) 私の身體は如來の靈應を宿すべき宮殿であるのだから、清きこと宛も穢れなく清き用をなし、然かも何の邪心なき香爐の如くありたいものである。そしてまた私の心は現に煩惱が起り通しであるが、それを眞實の智慧に依て燒き捨てつゝ常に菩提と變化せしむべく、恰度香爐の火が香木を焚いてすがすがしい香を放つやうに、私の心をして智慧の火の如くあらしめたいものである。

かくの如く私の身體が清き香爐であり私の妄心が烈々としてするどき智慧心と變化して火の如くにならしむるならば、汚れある生活を清く正しくし(戒)また心をして理想に統一せしめて、以てよりよき人格へ、より高き人格へ、向けしむるところの(定)この二つの薫りある香木を念々に焚いて、横、十方に廣く、豎、三世に亘つて、眼覺め行く一切の聖者達に供養し、其御心に添ひ奉りたいものである。

講 贊

信仰なくして眞人生を完ふすることは出来ない。信仰は人間最高の價值に生きやうとする原動力だからである。

人々は信仰を以て人生の慰安であり休息所である如く思つて居るらしい。それも相當に宗教を理解して居る人にしてさうである。

甚だしいのになると、物的幸福をもたらさないやうな宗教は價值がないと思つて居る人さへある。

皆んな個人主義思想が人々の根柢に渦を巻いて居るからである。

信仰は決して個人的なものではない。人生を完ふするのが其目的である以上、横は十方に豎は三世に亘つて深く廣い關聯を持つところの人生を完ふすべく、社會と同一な姿に於て、その理想を進めて行かなくてはならないのである。

此處に勤行法の重要性がある。一人一人が勝手にやるのではなく、他と共に同じ氣持を以て勤め行ふ社會性をもつものが勤行法なのである。

一人でもやれない事はないが、三人五人十人百人千人と多ければ多い程、莊嚴美崇高美を増大して行くのが勤行法の特徴である。

偕て、勤行法の最初に於て「香偈」を稱へることは、先づ心

田を開拓せんとする意味からである。

それを何う開拓するか。それには先づ佛教の通規であるところの「戒定慧」の三を以てせんとするのが、佛教を尊崇せんとする者の當然な考でなくてはならない。そして其内「慧」は眞人生を完成せんと心の眼を開くことで、此の心火が戒定を起し、亦たそれは戒定の二から自然に長養され増上されるものであるから、當面の問題としては此の心を持つて「戒」と「定」との二を實踐せざるを得ないことになる。

然らば先づ「戒」とは何であらうか。「戒」の原名を「尸羅」と云ふ。「尸羅」とは行爲、習慣、性格のことである。して見れば私達の生活行爲の傾向そのものに外ならぬ。

私達の行爲には善惡無記の三通りあるが、無記は「不善不惡」であるから問題外として、善惡二行爲の中、無論「惡行爲」のいけないことは云ふまでもないから、結局「戒」の目的は「善行爲」をなす爲であり「よりよき生活」をなさんが爲のものであらねばならぬ。

かの七佛通誡偈と云はれる

諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意

の止惡、進善、淨意の三も畢竟「戒」の目的に遡ふ三方面の心意氣に外ならないし、止惡の最も根本的なものとする

殺す勿れ。偷む勿れ。淫る勿れ。欺く勿れ。醉ふ勿れ。

の五戒に徹底することも「よりよき生活」を要求する戒の目的を達成せしめんとするものである。

また「定」とは何であらうか。

「定」は梵語「三摩地」又は「三昧」の譯で、心が一つに止まる状態を云つたものである。直譯すれば「一處に近く置く」と云ふのださうであるが、心が散亂せず動かざる姿を云つたものであり、其種類は有心無心「八萬四千種の三昧門あり」と云はれる位であるから無數にあるべきであらう。然し要を取つて云へば妄心を休止せしめて、天地の大道にめざめ行く智慧を獲得する爲のものである。随つて其種類が如何に無數にあつても、此目的以外のものは「邪定」であつて「正定」ではないことも明瞭であらう。

即ち「佛心」と相應し「佛智」と相應するものでなくては本當の定ではない譯である。

然し私達に之が出来るかと云ふに、古來から幾多の修行者が精進を勞らせてやつたけれども、中々容易のことではなかつたのである。そこで平生の生活を変へて行かねばならぬとの見解から「戒」がやかましく云はれ、謂ゆる清淨生活を嚴守することになつたが、現行犯は勿論のこと、精神の動きまでも「犯

戒」者の中にに入れてしまふ菩薩戒に於ては、もう到底凡夫の及ぶ所ではないのである。

さればと云つて外に「解脱」の方法はない。

其處で自然に「念」の問題が起り「願」と云ふことが重要になつて来る。

「念」は心に明記して忘れないことで、成唯識論には「曾て受けた所の境を憶持して忘失せしめず能く定を引く」のが「念」である。と云つて居り、また五根の「信進念定慧」の順位にも「定の前に「念」を置いて居るから、「戒」が「念」に置き替へられてあると同時に「定」の前提たる重要な心狀として認められてあることが思ひ合はされるのである。

そこで「念戒」と「念定」とが問題になつて来る。

随つて佛教の何處かにこんな事が取り上げられて有り相なものであると思はれる。すると「六念法」の中に

「念戒無上菩提本」

と云ふ文句があり、

また菩薩受齋經の中には「菩薩に十念あり」として過去未來現在の佛を念ずる次に

「當に尸波羅密持戒を念ずべし。是れ菩薩の法なり。當に尸波羅密を念ずべし。是れ菩薩の法なり云云」

とあつて「念戒」「念定」が「念法」の一部として取り上げられて居ることを發見するのである。

少くとも佛道を志す限り、そして「戒定」の二つが、佛道修行の根本的なものである限り、そしてそれがまた事實上完全には行はれ難いものである限り、不斷の「念」として念々にそれらが念ぜられてよい譯である。

恰度「香の煙」が絶間なく流れ流れて、四方を薫らしつゝ空の方へすひとられるやうに消えて行く如く、せめては私達の一日中の「念」が、戒と定とを念じつゝ、三世十方の佛をなつかしみ行くことは、誠に崇高な情景ではないか。

しかも其「念」は「願」に依て一層強く支持されるであらう。大智度論には「行」を牛車の牛に譬へ「願」を御者に譬へて居る。

いくら牛の力が強くても野放途にして置いたのでは飛んでもない方向へ車を挽いて行くかも知れないのである。また場合に依ては退屈を感じて途中で寝そべつてしまふかも知らないのである。

此處に「願」の御者が居れば、方向を正しくし懈怠心を鞭撻して呉れるであらう。

私達に取つて私達の心は牛であり私達の身體は車である。

然し、此香偈に於ては、我が身體を香爐となし、我が心を香の火となして、此の香爐の中の火に「念戒香」と「念定香」とを焚きつゝ、身の垢と心の垢とを焼き盡くさんと志するのである。そしてそれを「願」に依て強めて行かうとするのである。かくて微ながらも香り清き「念」の煙を以て、十方三世の御佛達に供養せんと、己が誠を捧げるのが香偈の氣持である。

之はもう既に敬虔な信の氣持でなくて何であらうか。

今、此偈を唱へながら、此意味を味ふ時、私達の身と心とに生ひ茂つて居る雜草は刈り取られて、正しく信田は培されることであらう。味へば誠に有り難い偈文である。

随つて具體的に香を上げる時も、此偈を唱へ此意味を味ふ事が本當である。

燒香にしても線香にしても同じことであるが、燒香ならば一回、又は二回、又は三回と繰返す。即ち一回の時は「一心」を表し、二回の時は戒香定香を表し、三回の時は身と口と心との三を表する氣持である。

線香ならば、一本か、二本か三本かで、それ以上は上げなくてもよい。

世には澤山お線香を上げた方がよいと思つて居る人もあるが、此香偈に合せるならば二本がピッタリして居る譯である。

香は「信心の使」とも、云ひ、また「佛の使」とも云ふ。私達の心をして清淨ならしむるからであらう。

此意味に於て「念佛」もまた一種の心香であると云へる。

即ち念佛する時、おのづから「惡心」を消滅せしむるから「戒香」となり、また念佛の信に依て心が一つにまとめられるから

「定香」となる譯である。

内、心を清め、外、生活を清め行くこと、それは亦た眞人生を得ることであり、眞生命を完ふすることである。

かくて此身と心とを清き香煙として一切の聖者に捧げ、己を空しうして時間を盡し空間を盡す三世十方のめざめ行く根元に供養する姿こそ、世にも貴い心境であつて、この心から孝も出、忠も出、和も出るであらう。

香偈の四句、文字は二十八字に過ぎないけれども噛みしめれば噛みしめる程、其味ひは津々として盡きないものがある。

(字 解)

智慧 世間的な智でなく本當に覺め行く智である。

念々 一人一日の中に八億四千萬念ありと云ふ其念々のことである。

である。

戒 律法ではなく眞實生活をなす根本規範のことである。

定 人格的に心をまとめて行くのが本當の定のはたらき

であつて、單に精神統一するのでは意味をなさない。
釋尊は四禪四定を「非聖求法」なりとして排斥せられて居る。

香

香には三種、四種、五種、六種、七種、八種、十種の別があり、經典に依ては十五、廿四、卅一、卅五種の名を擧げて居るが、常識的な分け方は質的には根香、莖香、葉香、果香の四種であり、形態的には塗香、末香、丸香、線香、練香（又は顆香）香木、香水、香油、香藥等である。そして沈香、白檀香、龍腦香、安息香、丁字香等は代表的な香である。

供養

供養は供給し資養する義で、一般的には香、華、燈、食の四種供養を云つて居るが、精神的には法供養、行供養などの理供養がある。また轉じては經供養、虫供養、橋供養、鐘供養、針供養、堂供養などの法事の事をも云つて居る。更には生きた人間へのものとして衣服、飲食、醫藥、家屋などを供養するを四事供養と云ふが、身供養は事供養の中の絶對的なものであらう。

三世

三世は過去現在未來を三世と云ふが、嚴密には永遠の過去から永遠の未來までを貫くのが盡三際（さんがい）の三世である。

十方

十方は空間を盡した全宇宙の意味で極限大のことである。

S.S.S.

つもく長のンベ

キンイ・スエンサ

金ペン代用耐酸ンベ萬年筆新發賣



萬年筆用
筆記用
スタンプ用

編輯部だより

◆十一月號も校了にならうとする時、皇軍の南支敵前上陸の號外を手にしました。皇軍の戦闘力の旺盛なる、我が國力の充實せる、實に感激讃歎せざるを得ません。

◆この時に當つて、我が編輯部員東慈道君の出征を見ました。同君は本會創立當始より編輯部にあつて、誠心誠意事に當り、且つ爲學の聞え高つただけに、今君を送ることは本會としては大きな傷手であるが、國家のためたゞ健闘を祈つてやみません。

◆本號巻頭は支那哲學の大家、文學博士山口察常先生に御願しました。平易に信を説いて淨土にふさはしい論説であります。

◆信仰實話も今月は豊富にのせ非常時の民心の中に如何に信仰が根強く芽ばへて行くかを示さうと努めました。

◆隨筆を寄せて頂いた山本瑞雲師は佛像彫刻の第一人者、短い文章の中にも信仰と佛像奉彫の精神との深いつながりを示された得難い一文と信じます。寫眞も師が御貸與下さいました。

◆小説、讀物も豊富に取揃へましたが、何分紙面があまり多くない上に、原稿が殺倒しておりますので、是非のせたい原稿、是非讀者にお目につけ度い原稿も割愛せざるを得ない次第です。然し、これだけでも相當に面白く讀めるものと存じます。

◆吉田絃二郎氏は今月は「飯塚部隊長」の上演、御旅行、放送等寧日なき御奮闘のため、御寄稿願へませんでしたが、來月には是非御寄稿願ふことになつております。

◆また、誌友だよりも益々盛んになつてまいりましたが、成可く簡単に、へ十五字詰十行、澤山のせたいと存じます故、その様に御寄稿下さるやう

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様願ひします。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ります。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で御願ひします。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから、廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひします。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三年十月三十日印刷納本
昭和三年十二月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人讃仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料五厘)

一ケ年 金一圓
(送料不要)

法然上人傳

中里介山著

文豪の手で再生された「勅修御傳」、これで
原典の精神に誰れでもが親しめる！

著者の言葉から……法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。

「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が
法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに
法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられ
た結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法印が近代杜撰の著作を捨て、信用
すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)そ
れ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つ
の親切であると信じて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

發行所

隣人の友社

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七

三六版二五〇頁
美麗クロース装
定價 六十錢
(送料六錢)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十三年十月廿日印刷納本 昭和十三年十一月一日發行

淨土第四卷 第十一號

定價 金十錢 (送料五厘)
滿鮮臺灣等 金十一錢
外地定價